

フランスにおけるカロタイプ紙写真の進歩

写真家 Nadar と Émile Zola

中 崎 昌 雄

はじめに

1. Nadar の遍歴時代と写真の発明
 2. フランス作家漫画行列－石版画「Panthéon-Nadar」
 3. フランスにおけるカロタイプ紙写真
 4. フランス写真学会創立と Le Gray 「ワックス紙写真」
 5. Victor Hugo 「アルバム」 と Jersey 島現像所
 6. Nadar 「写真」 の始め
 7. Capucine 街 35 番地 「Nadar 写真館」
 8. 「Géant」 気球飛行と対プロシア戦争 「鳩通信」
 9. 印象派画家たちと Nadar, Zola との関係
 10. Zola と彼の写真趣味
 11. 鷗外－逍遙 「没理想」 論争－Zola と Nadar の晩年
- おわりに

付 録

1. 「紙写真に使用する手法について」 (翻訳)
Blanquart-Evrard, *Compt. rend.*, 24, 117 (1847)
2. 「カメラの映像を乾いた紙の上に作る紙写真」 (翻訳)
Blanquart-Evrard, *Compt. rend.*, 30, 663 (1850)
3. 「ネガ用写真感光紙の新しい作り方について」 (翻訳)
Gustave Legray, *Compt. rend.*, 33, 643 (1851)

はじめに

中京大学「教養論叢」前号（通巻 112 号）に発表した「コロジオン時代の 2 人の肖像写真家－ルイス・キャロルとキャメロン夫人」⁽¹⁾の中で私は、ヴィクトリア時代に生きたこの 2 人の「picturesque」な人物を取り上げて、2 人に共通する趣味「写真」とその分野での彼らの業績を紹介して

おいた。私がこの2人を取り上げたのは、彼らが撮った肖像写真が写真史の中で特異な位置を占めているという理由からだけではなく、彼らとヴィクトリア時代の文人、芸術家たちとの交遊の多彩さに惹かれたためでもある。2人は始めから1850年代に盛んになったコロジオン湿板法を使用したところも共通している。

イギリスにおけるこの2人とほとんど同じ時期に、フランスでは彼らに劣らず「picturesque」な人物、写真家 Nadar が活躍していた⁽²⁾。Nadar はキャロルやキャメロン夫人のような写真を趣味とするアマチュアと違って、パリで肖像写真館を経営していて成功していた。Nadar がイギリスの2人と共通するところは、彼が使用したコロジオン湿板法とその多彩な交遊関係であろう。「ベル・エポック」時代のパリの文人、芸術家のほとんど全てが Nadar の友人と言ってよいほどである。これは彼が自分の写真館で撮った肖像写真アルバムを眺めるだけで納得できるであろう。

Nadar より少し時代が下がるが、自然主義の作家 Émile Zola も同じように写真を趣味として、人物写真や風景写真に多くの優れた作品を残している⁽³⁾。Zola は画家 Cézanne と子供のときからの友人で、この関係から Zola の周りには彼を取り巻く「Soirée de Médan」派作家以外に画家の友人が多い。このような理由から Nadar と Zola の写真を紹介することは、そのまま「ベル・エポック」時代のフランス芸術の側面史を提供することに他ならないであろう。

1. Nadar の遍歴時代と写真の発明

Nadar の本名は Gaspard-Félix Tournachon である。父親 Victor はリヨン生まれの印刷業者で、あまり土地の風習にこだわらない自由主義的な気質の人物であった。これは息子の Félix に色濃く引き継がれている。リヨンでの印刷業が成功したので父親はパリに本拠を移し、St. Honoré des Arts 街 195 番地で商売を始めた。長男 Félix が 1820 年 4 月 6 日に生まれたのはこの住所である。ただし Félix が教会で洗礼を受けたのは 1 年あとになっている。おそらく両親が正式に結婚していなかったからであろう。5 年後の 1825 年に次男の Adrien が生まれてから始めて両親は結婚届を出した。

Félix が10歳の1830年2月にパリ「Comédie-Français」劇場で Victor Hugo (1802-85) の史劇「Hernani」が初演された。このときまだ若かった Théophile Gautier (1811-72) は赤いチョッキを着用して応援した⁽⁴⁾。結果は Hugo を盟主とするロマン派の勝利に終わった。いわゆる「エルナニ合戦」である。この年はまた7月革命の年でもあった。市民王 Louis Philippe (1773-1850) が押されて即位した。始めは民衆側であった王も次第に反動化して人気を失い、漫画家 Honoré Daumier (1808-79) の格好の餌食となった⁽⁵⁾。Louis Philippe 王の放漫財政を皮肉って、風刺紙「La Caricature」に描いた彼の石版画「Gargantua」(1832) はとくに有名である。

Daumier はこれで6ヵ月の入牢をくらった。

初等教育を終えた Félix は Collège Bourbon から Collège de Versailles へと進んだが、彼が18歳になった1838年に父親の印刷業が失敗して一家は故郷のリヨンに帰るのを余儀なくされた。帰るとすぐ父親が死亡し、一時 Félix は医者なるための勉強をしたと言う。しかし、もともと派手で目立ちたがり屋の Félix が根気のいる勉強に耐えられるはずがない。このころからすでにジャーナリストとしての才能に目覚めた彼は、リヨン地方紙3つにパリでの見聞を踏まえて劇評を投稿し始めた。

夫を失った母親は次の年、1839年に19歳の Félix と弟の Adrien を連れてパリに戻ることにした。

1839年はいわゆる「写真騒動」の年である⁽⁶⁾。この騒動の主人公が数年前から「ジオラマ」館を経営して、その名をパリ中に知られていた人気者の舞台芸術家 L. J. Mandé Daguerre (1787-1851) であったのには Nadar も驚いたことであろう。Daguerre は始め動くパノラマ「ジオラマ」用に実物そっくりの風景画を描く必要から、カメラを利用して風景を写し取る研究を始めた。しかしあまり進捗をみなかった。これは研究に不可欠な物理学と化学の基本的な訓練が彼になかったためである。それが1829年12月になって Nicéphore Niépce (1765-1833) との10年間の共同研究契約が成立した⁽⁷⁾。Niépce は3年前の1826年にはすでに金属板に塗ったアスファルトの上に不完全ながらカメラの映像を固定できる「ヘリオグラフ」法を完成していた。

2 人の共同研究はあまり実績を挙げないまま 4 年が過ぎて、1833 年 7 月に Niépce が脳卒中で死んでしまった。息子の Isidore が父親 Nicéphore の代わりに共同研究を引き継いだ。父親と違って才能もなく十分な教育を受けていない Isidore はあまり役に立たなかった。結局 Daguerre が独力で研究を続けて、なんとか完成に漕ぎつけるまでに 4 年かかった。彼が有名な水銀現像法を完成したのが 1835 年春である。このときは、まだ定着法を解決していなかったが、1837 年になると一応の目安をつけるのに成功した。濃い食塩水で洗うのである。Daguerre は自分の手法を「ダゲレオタイプ」(Daguerreotype) と呼んだ。別名、銀板写真と呼ばれるこの手法ではその名のとおり銀メッキ銅板を使用する。磨いた銀表面にヨウ素蒸気を触れさせると黄金色のヨウ化銀膜ができる。これが感光膜である。この銀メッキ銅板をカメラに入れて露光してから、感光膜に水銀蒸気を当てる。ヨウ化銀に光が当たると、光が当たった所だけが銀粒子になり、この銀粒子が水銀蒸気と反応して水銀アマルガムを与える。あと濃食塩水で洗うとヨウ化銀が不活性して定着できる。水洗、乾燥した銀板を斜めからみると、水銀アマルガムのところが光を反射して白色に見える。陽画である。ただし始めは直射日光の当たった明るい建物を撮るのに 30 分の露出を必要とした。

しかし画期的な発明であるのには間違いない。Daguerre は始め予約制にして 1 人 1000 フランで手法を教えて、金儲けしようと企てたが計画は思うように行きそうになかった。結局、当時パリ天文台長で下院議員でもあった F. D. Arago (1786-1853) が仲に立って、この特許をフランス政府が買い取り、その見返りとして Daguerre と Isidore に年金を支給する案に落ち着いた。年金法案を議会に提出するまえに科学学士院の了解を得ていた方が得策だと考えた Arago はこの年、1839 年 1 月 7 日科学学士院月曜日例会で発明の概要を説明した。これが「写真騒動」の始まりである。

法案可決前だから具体的な内容には全く触れなかったが、報道はたちまち全ヨーロッパを駆け巡った。年金法案の方は 7 月 3 日になって Arago が下院で説明し、上院では 7 月 30 日に有名な化学者 J. L. Gay-Lussac (1778-1850) が説明した。年金法案が両院で可決されたので、8 月 19 日に手法の詳細を発表する公開講義が開かれた。この科学学士院-芸術院共催の発

表会では始め Daguerre が説明する予定のところ、その朝になって Daguerre が固辞したので急遽 Arago が代行した。

Arago の公開講義は抽象的な部分が多く、しかも実演がなかったので招待者で満員だった講堂の聴衆の多くには不評だったが、この事情は次の日に市場に出た操作手引き書「ダゲレオタイプ教本」によって解消された。この 79 ページの小冊子は実際的に書かれていて、すぐにも実験できるように説明がなされていた。その日のうちに売り切れたと言われている。薬局と眼鏡屋の品物は売り切れとなり、全パリ市民は「銀板写真マニア」(Daguerreotypomania) に取り憑かれた。

もともと芝居好きで Daguerre が監督した舞台装置や「ジオラマ」公演を良く知っていた Nadar は興奮したに違いない。ただ彼が 60 年後に書いた「私が写真家だったころ」(Quand j'étais photographe) (1900) の第 11 章「写真の創始者たち」の中には残念ながら、当時の自分について触れるところがない⁽⁸⁾。

パリ「新橋」(Pont-Neuf) に店を開いていた光学機器商 N. P. Lerebours (1807-73) は機敏な男で、ダゲレオタイプが公表されるとすぐに、多くの画家を雇ってこれに自分の店で作ったカメラや写真用具をもたせて世界各地に派遣した。行き先はイタリア、スペイン、ギリシャ、アルジェリア、エジプト、パレスチナそれにシリアなどで、ここで撮った銀板写真を手本に版画に彫って写真集を刊行しようと言う計画であった。またヨーロッパ各地の写真家からの作品も購入した。そして早くも 12 月にはイタリア、コルシカ島で撮った銀板写真の販売を始めている。写真集の方は第 1 集 60 景、第 2 集 51 景で 1843 年 4 月に完結した。刊行は大体 4 景ずつを分冊にした。

「Excursion Daguerriennes: vues et monuments les plus remarquables du globe」

集めた 1200 枚の原板の中から 111 景を選んで鋼鉄版画に彫った。

その中の 2 景だけは Fizeau 法に従って直接に銀板写真から「写真印刷」にしてある⁽⁹⁾。

「写真騒動」の次の年、1840 年には作家 Gautier が友人 Eugène Piot とスペイン旅行に出かけた。このとき彼らはカメラを持参したが、Gautier

「スペイン旅行」(Voyage en Espagne)によると、雨の日が多くてあまり写真は撮れなかったらしい。

1839年1月7日 Arago 発表を聞いてもっとも驚いた1人はイギリス人 W.H.Fox Talbot (1800-77) であろう。彼は5年も前の1834年から研究を始めていて、Arago 発表の数ヵ月まえ1838年暮れには、これまでの研究結果を短い速報に纏めてイギリス王立学会に報告しようと考えていた⁽¹⁰⁾。その矢先の衝撃的な Arago の発表である。Talbot が自分の研究成果を正式に発表したのが1839年1月31日王立学会木曜日例会で、彼は自分の方法を「光写生」(photogenic drawing) と呼んだ。ただ詳しい内容は秘密であるから具体的に分かるのは、「感光紙と呼ぶ1枚の紙」などから銀板写真と違って紙を使う方法らしい程度である。あと Talbot は2月21日に王立学会総務 Christie に手紙を書いて、もう少し詳しくその手法を公開した⁽¹¹⁾。食塩水に浸けて乾燥させた紙に、硝酸銀水溶液を塗って紙の上に塩化銀を沈着させる。これが感光紙でこれをカメラに入れて露光する。現像がないから「日光焼付け写真」である。定着にはヨウ化カリウム水溶液または濃食塩水を使用した。しかし、この時期は感度がダゲレオタイプと同様まだ低くて、明るい直射日光のもとで建物の写真と撮るのに30分もの露出を必要とした。出来るのは白黒反対の陰画であるから、陽画にするのにはもう一度焼き付けねばならない。

Talbot の友人 John Herschel (1792-1871) は天王星発見(1781)で有名な天文学者 William Herschel (1738-1822) の一人息子である。彼は20年も前の1819年にチオ硫酸ナトリウム(ハイポ)を発見して、この水溶液がハロゲン化銀を「砂糖が水に溶けるように」溶かすことを観察していた⁽¹²⁾。Herschel がこれを写真定着に利用することを考えて当然である。彼はこの結果を Talbot から少し遅れて3月14日王立学会に発表した⁽¹³⁾。

Talbot はハイポ定着をあまり信用しなかったが、Daguerre は迷わずすぐにこれを採用した。

残念ながらこの段階では、ダゲレオタイプも「光写生」もまだ感度が低くて、動かない建物、記念碑、彫刻、風景などの撮影には使えたが、全ての人々が期待した肖像写真を実用的に撮ることはできなかった。しかしこの状況も1840年の暮れから1841年の初頭にかけて大幅に改善されること

となった。「光写生」では没食子酸による潜像の現像、ダゲレオタイプでは促進剤「quick」の発見である。

Talbot は自分の新しい方法を「カロタイプ」(calotype) と名付けて、これを 1841 年 6 月 10 日の王立学会で発表した⁽¹⁴⁾。Talbot の新しい手法ではヨウ化銀紙のうえに「没食子酸－硝酸銀」液 (gallo-nitrate of silver) を塗る。これは酢酸に硝酸銀と没食子酸を溶かした溶液である。この感光紙をカメラに入れて露出するが、明るいところなら人物を撮るのに 30 秒ほどで十分となった。現像にはもう一度「没食子酸－硝酸銀」液を塗って温めるとよい。定着には臭化カリウム水溶液を使った。同じ 6 月 10 日の王立学会例会で Talbot の報告に続いて別の銀板写真改良法の報告が読まれた。発表者はロンドン写真家 Antoine Claudet (1797-1867) である。彼は昨年 1840 年 3 月にダゲレオタイプ特許を購っていた。Claudet が発表した改良法によると「肖像写真が 5 秒から 15 秒と言う短時間の露出で撮れる」のである。この方法ではヨウ素蒸気だけを銀板に触れさせる従来の方法と違って塩化ヨウ素蒸気を使う。別にヨウ素蒸気に当ててから塩素ガスに当ててもよい。同じような方法はイギリスでほとんど同時に T. J. Goddard (1795-1866) によって開発されていた。彼の方法では塩素の代わりに臭素を使う。また同じころウィーン市では F. Kratochwila や Natterer 兄弟がヨウ素に塩素や臭素を加える手法を発表している⁽¹⁵⁾。

こうなるとダゲレオタイプでも肖像写真撮影が商売として成り立つ。パリでは例の Lerebours がまず最初に肖像写真館を開設して、1841 年には 1500 枚もの肖像写真を撮った。これと同じころ Louis と Auguste Bisson 兄弟もパリで写真館を開設した。あとになるがコロジオン湿板時代になってから始めてモンブラン頂上から写真を撮って (1861 年 7 月) 有名になったあの Bisson である⁽¹⁶⁾。Bisson 兄弟は 1848 年にスタジオを繁華な Madeleine 街に移し、このスタジオはやがて多くの芸術家たちの溜り場となった。Gautier, 詩人 C. Baudelaire (1821-67), 小説家 Honoré de Balzac (1799-1850), 画家 E. Delacroix (1798-1863) などが常連であった。この集まりはやがて Capucine 街 35 番地の Nadar 写真館に引き継がれることになる。

Bisson 兄弟はまたフランス議会上院, 下院議員全員の銀板写真を撮り、

あとでこれを銅版画として出版した。これは Nadar が文人、芸術家だけの漫画を集めて作った漫画 Nadar「パンテオン」(Panthéon-Nadar) (1854) の先駆となった。

Talbot はカロタイプに 1841 年 2 月 8 日イギリス特許をとり、同じ年の 8 月 20 日にはフランス特許をとった。彼はミニチュア写真家 Henry Collen (1800-75) にロンドン Somerset 街 29 番地に肖像写真館を開かせたが、この店は Richard Beard のダゲレオタイプ写真館に押されてあまり流行を見なかった⁽¹⁷⁾。それで 1843 年 5 月になってフランスでの市場の打診に助手 Nicolas Henneman を連れてパリに乗り込んで来た。

Talbot は「Institut de France」の学者を集めて実演して見せ、Henneman は数週間「Nantes」ホテルの大広間で実演してみせて宣伝したが、フランスでは特許を購って肖像写真館を開こうとする人はなかった。失望して帰国した Talbot は別の企画で自分のカロタイプの優秀性を宣伝しようとした。写真アルバム「自然の鉛筆」(The Pencil of Nature) の刊行である⁽¹⁰⁾。Talbot はこの目的に 1843 年 12 月から Reading 市に現像所「Talbot Establishment」を開設した。アルバムの刊行は次の年、1844 年 6 月から始まり 1846 年 4 月までかかった。6 分冊で合計 24 枚の紙写真を貼って作った。第 6 分冊は 73 部しか売れなかったから、この企画もそう成功とは言えなかった。

Nadar の方はこのころ不遇の模索時代である。相変わらず劇場回りをして「La Vogue」紙や「Revue et Gazette des Théâtres」紙に劇評を書いて僅かな金を稼いでいた。やがて母親から離れて「Jean de Beauvais」街の小ホテルで、同じ年ごろの野心は持っているが不遇な若者たちの群れに混じってその日暮しの生活を始めた。若者たちは安酒を飲みながら人生、芸術、宗教、政治それに女を論じて夜を明かした。彼の友人の作家 Henri Murger (1822-61) が「ボヘミアン生活」(Scènes de la vie de Bohème) (1847-49) の中で描いているとおりである。この小説はあとで G. Puccini (1858-1924) が歌劇「ラ・ボエーム」(La Bohème) (1896) に仕立てて知られるようになった。

Talbot が「Nantes」ホテルに泊まってカロタイプの宣伝をしていた 1843 年、23 歳の Nadar は僅かな生活費を稼ぐためにありとあらゆる職

業を経験していた。このころ街で Nadar を見かけた友人は次のように書いている⁽¹⁸⁾。

「灰色の帽子に緑色の短いコートを着て、手をポケットに入れパイプをくわえて、なにか苦しい考えにふけっているように頭を垂れていました。彼は独りではありませんでした。彼のあとをつけて長い毛のスパニエル犬が1匹が歩いていました。尾も耳も垂れ下がり、痩せてヒョロ長く、まるで主人そっくりでした。」

Daguerre「ジオラマ」館は1839年3月8日に全焼してしまった。この日Daguerreは電信発明家アメリカ人S. F. B. Morse (1791-1872) のところで電信機の実演を見せてもらっていて留守であった⁽¹⁹⁾。この「ジオラマ」館のあった Sanson 街4番地は劇場街 Temple 通りからそう遠くはない。Temple 通りはふつう「犯罪大通り」(Le Boulevard du Crime) と呼ばれていた。Marcel Carné 監督の大作「天井桟敷の人びと」(Les Enfants du Paradis) の舞台は、このころNadarが劇評の記事を取るためにうろついていた当時の Temple 通りその物である。

このころのパリ市街は第2帝政時代のG. E. Haussmann (1809-91) による改造以前であるから、道幅も狭くゴミゴミした裏通りの多い下町風の町並みであった。人の集まる中心街と言ってもたかだか数キロ4方の範囲で、芸術家や文人が集まる場所は決まっていたから、お互いのサークルも重なり合い人びとはすぐに顔馴染みとなった。小説家、画家、劇作家、作曲家、俳優、女優、歌手、批評家などは1つの小さな世界を創っていたのである。この中であって赤毛で背が高く、クリクリとよく動く丸い眼をしたNadarは目立つ存在であった。やがて彼は飽くことを知らない好奇心と、疲れを知らないそのエネルギーを資本に、この小世界の中で自らの存在を確立することになる。

2. フランス作家漫画行列－石版画「Panthéon-Nadar」

「写真騒動」の年にNadarは6000フランの遺産を手にした友人を誘って「金の文庫」(Le Livre d'Or) という週間シリーズ物を刊行する計画を立てた。このときNadarがリストアップした作家はAlexander Dumas (父) (1802-70), GautierそれにHonoré de Balzacなど大物ばかりで

あった。シリーズは3回しか続かなかったが、NadarはBalzacをRiche-lieu街のアパートに訪ねたときの印象を、60年もあとになって著書「私が写真家だったころ」の中に書き残している⁽²⁰⁾。第1章「Balzac et la Dag-uerréotype」にはBalzacの写真嫌いのエピソードがある。

彼は写真を撮られるたびに、自分の個性がはぎ取られると信じていたらしい。これはGautierなども同じであった。後年NadarはBalzacの銀板写真を手にいれたが、これがBalzacのただ1枚の写真として、あとでR. Rodin (1840-1917) 作「バルザック像」(1898)の原型になった。「金の文庫」の失敗のあとで子供向けに「黄金時代」(L'Age d'Or) シリーズを出したがこれも9回で中断した。

彼の名前が知れ出すと、リヨン土着の名前で田舎風の「Tournachon」が不便になってきた。もっと発音しやすく覚えやすい名前にしたらと、人に言われて思い切って「ナダール」(Nadar)と呼ぶことにした。このペンネームの由来には2説ある。このころ名前を切って間に「dar」を入れるのが流行った。すると「Tournachon」は「Tournadar」となり、これを縮めて「Nadar」としたと言うのである。別の説では彼の風刺漫画が鋭いので、人がこれを「針でこねる」(tourne à dard)と批評した。これが縮まってできたとするのである⁽²¹⁾。おそらく始めの説の方が本当らしい。

いずれにしてもこのペンネームは成功であった。

1842年から左翼系新聞「Le Corsaire-Satan」の編集に参加した。編集長はスエズ運河(1859-69)で有名となるF. M. Lesseps (1805-94)の弟Charles Lessepsであった。Nadarはもともと共和制支持で反王政派であったが、この傾向はこのときから余計に強くなり、官憲から注意人物として睨られ始めた。この年はまた「文芸家協会」(Société des Gens de Lettres) 会員になった。また、もともと絵心のあったNadarがDaumierの影響からか、風刺漫画を書き始めたのもこのころからである。

1848年になると2月革命が勃発し、その聳動はパリから全ヨーロッパに広がった。市民王Louis Philippeはロンドンに亡命した。Daguerreは自分の銀板写真作品をナポレオン戦争後のヨーロッパ外交を牛耳っていたオーストリア宰相K. W. von Metternich (1773-1859)に送っていたが、この辣腕の外交官もイギリスへの亡命を余儀なくされた。共和主義者の

Nadar も 2 月革命の初期にはあまり政治運動に肩入れをしなかった。それが 3 月になってポーランド愛国詩人 Adam B. Mickiewicz (1798-1855) の祖国ポーランド独立運動の熱烈な演説を「Collège de France」学舎で聞くにおよんで、持ち前の血の気の多さからポーランド独立義勇軍に加わって、ポーランドに向けての行軍に参加する決心をした。このころ「Collège de France」に近い「高等師範学校」(École Normale Supérieure) では 26 歳になったばかりの L. Pasteur (1822-95) がブドウ酸の結晶形の研究から有機化合物の世界にも右と左の分子があることを発見していた。彼の数多い発見の最初を飾る輝かしい成果である⁽²²⁾。

ポーランド独立義勇軍の主体はパリ在住のポーランド亡命者 500 人ほどであった。Nadar は「Tounaczewski」と言う偽造パスポートをもって参加したが、ストラスブールからドイツ領に入ったところで逮捕され国外退去を命じられた。懲りない Nadar は 7 月に新しい旅券を発行してもらい、またポーランド独立義勇軍に加わって今度は Danzig まで行ったがここから呼び返された。このあと Nadar は少し右翼系の新聞「Le Journal」に参加した。編集長は当時の Nadar を次のように描写している⁽²³⁾。

「ある日 Gérard de Nerval が大男を連れてきました。脚も腕もとても長く、胴長で頭の上には真っ赤な髪が突っただっていました。だが眼は生き生きとして知性があり、神経質でもありました。」「Tournachon 君だ。こいつは気が利いているが、それでいてバカなんだ。君の新聞で雇ってくれないかね。母親思いの奴だ。だが注意しておくが、こいつはトンだペテンをかけるかも知れない。しかし心には金のハートを持っている奴なんだ。」

そのうちに「コミック・レビュー」(La Revue Comique) 紙に風刺漫画を描くようになり、絵画の腕を磨くのだといって画家について習ったりした。この新聞はすぐに潰れたが Nadar は次第に風刺漫画の腕で知られるようになり、1849 年からは風刺漫画紙「笑いの新聞」(Le Journal pour Rire) に加わった。この新聞は有名な「La Caricature」(1830 年創刊)、「Le Charivari」(1832 年創刊)を刊行した Charles Philipon (1806-62) が新しく作ったものである。ここでは画家 Gustave Doré (1832-83) と一緒に仕事をした。Doré はあとで Balzac「風流滑稽譚」(1855), La Fonta-

ine「寓話」、Dante「神曲」、Cervantes「ドン・キホーテ」の奇抜な挿絵で有名となる画家である。

1849年にはロンドンへ行った。Nadarの最初の海外旅行である。当時ロンドンには多くの亡命者がいたから、そのルポルタージュを書くためであった。しかし、このときの経費に足が出て破産し1850年8月には牢屋に入れられる羽目になった。

次の年、1851年はロンドン水晶宮万国博覧会でまたロンドンへ行くことになった。これは1842年に創刊され、最初の絵入り新聞として成功していた「ロンドン絵入り新聞」(The Illustrated London News)のフランス版を作ろうと言う計画であった。この新聞にはすでにフランス人画家Constantin Guy (1805-92)が雇われていてNadarを招いたのである。Nadarは2人の銅版工を従えてロンドン入りしたが目的のフランス版は出せなかった。しかし、この縁でNadarはGuyと終生の親友になった。パリに帰ったNadarはGoncourt兄弟の主宰していた高級紙「L'Eclair」に参加して、サロン出品の絵画に対する漫画評「Nadar-Jury au Salon」を寄稿し評判をとった。

同じころPhiliponは自分の漫画紙「笑いの新聞」に新しい欄を設け、これをNadarに担当させた。「Lanterne Magique」欄である。Nadarは有名人の漫画似顔絵にその人物の特徴を面白おかしく書いた短評を加えた。これがNadarの名を一躍有名にする「Panthéon-Nadar」に発展するのである。この方面の最初の仕事が新聞人J. Commerson (1802-79)と組んだ「現代人の変な顔」(Les Binettes Contemporaines) (1854-58)である。Nadarはこれを基に文学、ドラマ、絵画、音楽の4分野を網羅した漫画似顔絵集を作ろうと企てた。パリをオリンポス山に見立て、ここに住む芸術の「神がみ」(Panthéon)が一堂に会した漫画大ページェントを描こうと言う野心作である。

まず文学分野から始めた。ここだけでも300人もの作家の似顔絵を集めなければならない。これには弟Adrienを始めとして数人の助手と石版工の助力を必要とした。似顔絵には写真が便利だと言うのでAdrienに写真を習わせた。先生は画家くずれのGustave Le Gray (1820-62)である。それでも大勢の似顔絵を集めるのは大変である。Hugoは2月革命のあと

に立った大統領 Napoleon (1808-73) の 1851 年 12 月クーデターに反対して追放され、ベルギーを経て 1852 年 8 月からイギリス領 Jersey 島、1855 年 10 月からは Guernsey 島に移り、1870 年 9 月パリに帰るまでの 15 年をここで過ごした⁽²⁴⁾。このため Nadar は Hugo の似顔絵を描きに Jersey 島まで出かけねばならなかった。

大作「Panthéon-Nadar」は約 2 年を費やして完成し、石版刷りが 1854 年 3 月に店頭並んだ。300 人もの作家が左下の George Sand (1804-76) の大理石胸像に向かって行進する図柄である⁽²⁵⁾。人物はすべて Daumier の漫画にみるように頭だけ大きく描かれている。この石版画は有名になった割には金銭的に引き合わなかった。値段は予約者に 7.5 フランその他には 12 フランであったが、予約で売れたのが最初の 150 枚で、あと 3 ヶ月に 540 枚を刷っただけである。このため音楽家、画家の分野に「神がみ」シリーズをおよぼすのには資金がなくなり、あとで音楽家 G. A. Rossini (1792-1868), G. Meyerbeer (1791-1864), H. Berlioz (1803-69), J. Offenbach (1819-80), 画家 Delacroix と Doré を描き加えるにとどめた。

このあと Nadar は風刺漫画を各紙に寄稿することを続けるが、彼の好奇心はすでに新しい挑戦「写真」に向けられていた。

3. フランスにおけるカロタイプ紙写真

イギリスでは Talbot の宣伝活動にもかかわらず、カロタイプ紙写真を肖像写真用に採用して写真館を営んだ人はほとんどなかった。そしてコロジオン湿板法が一般化する 1855 年ころまでは、銀板写真で撮る肖像写真館だけが流行した。ただ唯一の例外はスコットランドである。Talbot はカロタイプ手法を公開する前から、当時 St. Andrews 大学学長であった友人 David Brewster (1781-1868) にその手法を教えていた。Brewster は Talbot にスコットランドではカロタイプ特許を取らないでくれと頼んだ。このころ St. Andrews 大学講師 John Adamson が Brewster に勧められて写真の研究を始め、1841 年 5 月になって手製のカメラで婦人の写真を撮るに成功した⁽²⁶⁾。そのときの露出は 2 分であった。John Adamson の弟 Robert Adamson (1821-48) は水車大工志望であったが、兄に勧められ

て写真を商売にしようという気になった。これが1842年夏で、1843年5月からエジンバラ市に写真館を開く運びとなった。写真館は繁盛したが Adamson は7月から David Octavius Hill (1802-70) と組んで仕事を始めた。この年、5月にあった歴史的な「スコットランド自由教会」設立集会の光景を絵にして残そうと Hill が決心したのが原因である。決心したものの Hill には肖像画の経験がない。Brewster 学長に相談したところ写真を利用したらと言う意見で Adamson を紹介してくれた。Brewster も自由教会設立委員の1人だったのである。

6月から Hill-Adamson コンビは会議に出席した司祭の写真を撮り始めた。この作業が終わった後も2人は共同して写真館の経営に当たり、これが3年間ほど続いた。この間に2人が撮った写真は2500枚におよぶと言う。彼らが作ったアルバムは現在、世界中の博物館がもっとも求めている物の1つに数えられている。彼らの作品は何気ない構図が気持ち良く、その温かさが見る人の心を打つ⁽²⁷⁾。食塩水で定着した当時のカロタイプ印画は、赤色がかかったセピア色をしていて、柔らかな芸術的雰囲気を出すのに都合がよかったし、紙質の粗さも絵画的効果を挙げる助けとなった。

Adamson は1848年1月に死亡した。27歳の若さである。一方 Hill の最初の目的のスコットランド自由教会「分離署名」図が完成するまでには18年もの歳月を要した⁽²⁸⁾。

イギリスでのこんな状況に較べてフランスでは、カロタイプ紙写真がかなり広く使用された。これは海を隔てていることもあって、フランスではイギリスほどに厳格にはカロタイプ特許侵害が監視されなかったのにも原因がある。そのためかカロタイプ紙写真について各種の改良法がフランスで発表されることになった。その最初が1847年1月25日フランス科学学士院月曜日例会で発表された Louis-Désire Blanquart-Evrard (1802-72)「紙写真に使用する手法」についてである⁽²⁹⁾。Blanquart-Evrard は若いころ薬局の手伝いをしたが、一体に器用な男でミニチュア絵を描いたり陶芸にも手をつけたことがある。しかし40歳ころにはリール市でも有数の繊維商として成功していた。写真を始めたのはこのころからで、始めは写真家 Tanner からカロタイプを習った。

Blanquart-Evrard のカロタイプ改良法の詳細については、この報告の

全訳である「付録1」を見てもらえればよいのであるが、次にその大要だけを説明しておこう。彼の手法が Talbot カロタイプと根本的に違うのは「現像」操作を独立させた点にある。

また手法を「標準化」して使いやすくした点も評価されるだろう。

Talbot カロタイプ手法ではまず紙の1つの面に刷毛で硝酸銀水溶液を塗る⁽³⁰⁾。これを乾かしてからヨウ化カリウム水溶液に浸けて乾かす。これが「ヨウ化紙」(iodized paper)である。撮影するには、ヨウ化紙の硝酸銀水溶液を塗った面に「没食子酸－硝酸銀」(gallo-nitrate of silver)液を刷毛で塗る。これは没食子酸と硝酸銀を希酢酸に溶かした溶液である。このあと紙を水に浸けてから乾燥して使用する。乾燥した物は3ヵ月ほど保存が効くが、作ってから数時間以内に使うのが望ましい。カメラに入れるときは塗った面をレンズに向ける。現像にはこの面にさらに「没食子酸－硝酸銀」溶液を刷毛で塗って温める。定着するときも同じ塗った面に臭化カリウム水溶液を塗り、1-2分してから水に浸ける。

Blanquart-Evrard はこの1面だけを使う方法はよくないと言う。

「感光膜は表面だけであるからハイライト部の色が淡く、ハーフトーン部は透明さに欠ける。このような考察の結果、私は1つの原理に到達した。それは溶液反応の原理に従って紙の生地全体を吸収 (absorption) によって感光化しなければならないことである。」

Talbot が1面だけに塗ったのは、その当時は高価であった試薬を節約するためであろう。Blanquart-Evrard は1つの面にだけ塗る代わりに紙全体を溶液の中に浸ける。また Talbot 法では硝酸銀を含んだ「没食子酸－硝酸銀」溶液を始めから塗っておき、現像のときにも同じ「没食子酸－硝酸銀」液を塗る。ところが Blanquart-Evrard 法では始めからこの液を使用せず、最後の現像のところに没食子酸飽和水溶液だけを使うのである。

すなわち「現像」操作の独立である。

次に彼の報文にしたがって操作の順序を説明しよう。

まず硝酸銀水溶液を入れた平皿に紙を浸けてから乾燥する。次にヨウ化カリウム、臭化カリウム水溶液の皿にこの紙を浸ける。これを乾燥した物は数ヵ月の保存が効く。写真を撮るときはガラス板の上に硝酸銀の希酢酸溶液を数滴注いで、この上に上記のヨウ化銀紙を載せる。溶液がよく浸み

とおったところで、この上に水を含ませた数枚の上質紙を載せ、さらにこの上にガラス板を載せてから、撮り枠に入れてカメラに装着する。露出はカロタイプの4分の1でよい。現像するには露出済みの感光紙をガラス板に載せてこの上に没食子酸飽和水溶液を注ぐ。現像が適当なところまで進んだら、水で没食子酸を洗い去り、感光紙の上に臭化カリウム水溶液を注いで15分間放置して定着する。あと多量の水で洗浄、乾燥してから、蜜ロウを熱アイロンで紙に浸み込ませて透明にするとよい。以上の操作で、現在のように溶液を含んだ皿の中に感光紙をドブプリと浸さないのは、Talbot法と同じで試薬を節約する目的であろう。

焼付けには塩化銀紙を使うが、ここはTalbot法と同じで現像のない「日光焼付け」であるから、定着をハイポ水溶液ですると終わりである。このBlanquart-Evrard手法が便利らしいと言うので、科学学士院と芸術院の合同審査委員会が自分たちの前で実験してみせよと命じた。さらに4月になってから「Collège de France」で、3日間10人の委員が審査して審査の結果を6月19日に報告した。委員会はこのBlanquart-Evrard法は本質的にTalbotカロタイプ法の改良であるが、便利でより信頼のおける結果を与えるところに特徴があるとした。Blanquart-Evrardの最初の報告には発案者Talbotの名前に対する言及が全くなかった。委員会報告はこの点も訂正したのである。

Talbotはこの年6月オックスフォード市であった英国科学振興会でBlanquart-Evrardの報告を次のように非難していた。

「このひどい科学的海賊行為。」(This glaring act of scientific piracy) Blanquart-Evrard法で作った初期写真アルバムの中で、もっともよく知られているのはMaxime Du Camp「Egypte, Nubie, Palestine et Syrie」(1852)であろう⁽³¹⁾。Du Campはフランス文部省の後援で行くオリエント考古学探検旅行にBlanquart-Evrard法写真を利用することにした。出発したのが1849年11月で、この旅行にはあとで小説「ボヴァリー夫人」(Madame Bovary, 1857)で有名になる作家Gustave Flaubert (1821-80)も同行した。220枚撮った陰画から125枚を選びBlanquart-Evrardが21×16cmプリントに焼付けてこれをアルバムに貼った。フランス政府だけで20部を購入しているから全体では50部は作ったのだろう。

Blanquart-Evrard 法は合同委員会の報告にあるように、Talbot カロタイプより使いやすく感度も優れていたが、撮影するすぐ前に硝酸銀溶液に浸け「湿ったままで」使用しなければならない。このため同じように「湿ったまま」で使用する、あとのコロジオン湿板法と同じように、旅行先に暗室テントを携行する必要がある。その点 Talbot カロタイプ法の感光紙は乾燥したままで、3 ヶ月かそれ以上でも品質が落ちずに保存できて便利であった。

このように元の Blanquart-Evrard 法そのままでは旅行に不便だと言うので、Blanquart-Evrard は 1850 年 5 月 25 日科学学士院で新しい乾式手法を発表した⁽³²⁾。

「カメラの映像を乾いた紙の上に作る紙写真」

この報告の全訳が「付録2」である。1847年第1報のときからBlanquart-Evrard は写真を工業にまで発展できると言う見通しを持っていた。1850年第2報の始めに次のように言う。

「写真術に習熟した人をして、これをさらに有利な工業にまで発展させるように決心させるのには、化学操作に経験のない人のために紙写真の操作を簡便で、確実かつ容易にすることが必要である。この新しい目的のための第1条件は露出の場所で要求される煩わしい操作からの開放である。」

彼の乾燥紙写真の手法の大要は次のとおりである。乳漿 (partie claire du lait) の中に卵白を入れ、全体を沸騰してから濾過し、この中にヨウ化カリウムを溶かす。ついで、この中に紙を2分間浸してから引き上げて乾かす。これを感光化するのには、ガラス板の上に硝酸銀水溶液を注ぎ、この上に上記のヨウ化カリウム紙を載せる。この紙を吸取紙で乾燥してから、紙の上に乾いた丈夫な紙を載せ、さらにガラス板を載せて2枚のガラス板で感光紙を挟み、撮り枠に入れてカメラに装着する。乾燥したままでどれだけ永く保存できるか書いてないが、少なくとも2-3日は大丈夫なのであろう。これであれば旅行先に暗室テントを携行する必要がなくて便利である。ただし感度は湿式法よりずっと悪く、短いときで5分の露出は必要であった。現像にはこの露出済みの感光紙を、没食子酸飽和水溶液の膜の上に載せ、適当な濃度の画像が現れたら、これを臭化カリウム水溶液に入

れて定着する。あと水洗，乾燥で出来上りである。この陰画から焼付けた印画はキメが細かく諧調も豊かであると言っている。この報文のあとにアルブミン（卵白）塩化銀印画紙の作り方が出ている。卵白の中に飽和食塩水を加え，濾過してからこの中に紙を浸す。これを引き出して硝酸銀水溶液に浸けてから乾燥して印画紙を作る。

1851年9月Blanquart-Evrardは友人H. Fockedeyの持っていたリール市郊外の土地Loos-les-Lilleに「リール現像所」を開設して営業を始めた。Talbot「Reading 現像所」の開設1843年より8年も遅い。リール現像所ではヨーロッパ各地の写真家からの依頼で，彼らの送ってくる陰画から焼付けて陽画プリントを作るサービスをした。ここでのプリントは色調が黒色で美しく，退色しないので評判がよかった。写真印刷がまだない時代だから，写真画集を刊行するには陽画プリントその物をアルバムに貼り，これに説明文を挿入するしか方法がなかったのである。Talbot「Reading 現像所」では現像を使わず食塩紙に「日光焼付け」する方式（printing-out）であったが，リール現像所では没食子酸で現像する「現像」方式（developing-out）を採用したから焼付け時間を極端に短縮できた。ここでの作業の様子はあとでBlanquart-Evrardと共同でJersey島現像所を経営したThomas Sutton（1819-75）の書いた報告からわかる。SuttonがBlanquart-Evrardの死後（1872）に書いた回想記である⁽³³⁾。

「雨の日でもカロタイプ陰画から200-300枚ものプリントができる。」
「窓にレールがあってこの上を1台のプレス焼き付け枠が出入りできるようになっていた。またこの窓には黒色シャッターがあって，これがギロチンのように上下に開閉できた。陰画の露出時間は数秒である。それで250枚を露光するのに1時間半でよかった。作業は秒を刻むメトロノームを持った少女がした。ある数の露光が済むとプリントは纏めてこれを現像室に送った。ここでは3-4人の少女が雇われていて1人が一度に20-30枚の現像を受け持った。現像時間は1枚につき約20分であった。250枚焼き付けた中で13枚ほどがオシャカで，残りを本にしたり売ったりした。」「少女たちは写真以外の時間を農業やその他に使った。まとまった注文があると期日を決めてその日までに仕上げた。以上がわれわれの現像法である。リール市Blanquart-Evrard 現像所の最後

の5年間でこの田舎の少女たちはこの現像法で、残りの全ヨーロッパが他の現像法で仕上げたよりも多くの完成品を提供することができたのである。」

40人の少女を雇いプリントの仕事のないときは農業に従事させた。作業場の温度は21℃に保った。印画紙は紙をヨウ化カリウムと臭化カリウムを含むゼラチン溶液に浸し、乾燥してからこれを希塩酸蒸気に当て、硝酸銀水溶液に浸けて感光化した。あと乾燥してから陰画と重ねて焼付け枠に入れる。これはレールの上に乗っていて暗室から外に出して数秒間露出する。「焼き出し」でなく「現像」方式だから露出時間が極端に短くできた。焼付けた印画紙が20-30枚たまったところでこれを現像室に送り、没食子酸飽和水溶液に浸けて約20分間現像した。脱色防止の見地から定着には特に注意を払った。ハイポ定着は2回繰り返す、ついでFizeau金塩処理を施した。このあと何度も水を代えて数時間水洗する。最後に日光で乾燥すると、もとの赤褐色が美しい黒色に変化した。

Suttonはカロタイプを1850年Jersey島で習った。このあとイタリアへ写真旅行に出かけ、1853年帰路リール現像所に立ち寄り自分の写真のプリントを依頼した。彼の写真画集「Souvenirs de Jersey」は1854年に出版された。SuttonはこのときBlanquart-Evrardに100ポンドで彼のプリント法の秘密を売らないかと誘いかけたが断わられた。次の年、1855年には「ロンドン写真学会」に退色問題の対策を考える7人の「退色委員会」(Fading Committee)が設けられた⁽³⁴⁾。食塩紙「日光焼き出し」によるカロタイプ印画はその退色甚だしくて問題になっていたのである。「ロンドン写真学会」は2年前の1853年1月に設立されたばかりであった。ヴィクトリア女王の夫君Albert公は写真好きでこの委員会に50ポンドの資金を提供した。また彼は秘書のBecker博士をリール市に派遣してBlanquart-Evrardと交渉して100ポンドで秘密を売るように交渉させた。残念ながらこの試みはSuttonのときと同じように不成功であった。ちょうどこのころ、1855年7月Suttonが自分で研究したプリント手法を公開した小冊子を出版した。その題には「永久的で芸術的なプリントが常に得られる」と唄われている。

「A new method of printing positive photographs, by which

permanent and artistic results may be uniformly obtained」

内容は Blanquart-Evrard 手法に近い。それで Albert 公が資金を援助するから、この方法で Sutton 自身 Jersey 島で現像所を開設するようにと勧めた。そのころ Blanquart-Evrard もリール現像所を閉鎖しようと考えていたので、Sutton の Jersey 島現像所「Establishment for Permanent Positive Printing」に合流することにした。これが1855年秋のことである。Victor Hugo はルイ・ナポレオンの追求を逃れて1852年8月から Jersey 島に亡命していたが、Jersey 島現像所の開設されたと同じころ、1855年10月に北の Guernsey 島に移住している。

「退色委員会」からの報告が1855年11月になって「Phot. J.」誌に出た。退色の原因には水洗の不足、古いハイポ溶液の使用、台紙に貼り付ける糊の酸性、湿気とくにロンドンでは大気汚染などが挙げられた。対策としては水洗をよくすること、金塩処理および湿気に対する配慮などが推薦された。

Jersey 島現像所では早速1855年12月から写真画集「The Amateur's Photographic Album」のプリントを開始した。これは1年間ほど続いた。また次の年1856年1月からは写真雑誌「Photographic Notes」を刊行し始めた。これらの活動にもかかわらず Jersey 島現像所は1857年に閉鎖することになった。2年間しか営業できなかったのである。ただ「Phot. Notes」誌だけはこのあと10年ほど、1867年12月まで Sutton の手で続けられた。

リール現像所でプリントされたアルバムには Sutton 「Souvenirs de Jersey」(1854) や、すでに挙げた Du Camp の近東写真アルバム(1852) など多数あるが、Auguste Salzmänn 写真アルバム「エルサレム」(1855-56) を忘れるわけにいかない。Salzmänn はもと風景写真家であるが、1854-55年フランス文部省からの依託で中近東の考古学写真旅行に出た。著名な考古学者で古銭学者 Louis-Félicien de Saulcy (1807-80) が1850年聖地で写生したと称する建物の絵が、定説のローマ時代様式と違うところから、「架空の産物」だろうと疑われていた。文部省はこの論争に写真で決着をつけようとしたのである。Salzmänn は6ヵ月の旅行で200枚のカロタイプ陰画を持ち帰り、de Saulcy の写生の正しいことを証明し

た。写真はその内の180枚をリール現像所で24×33cmプリントに焼付けて2冊本として出版した⁽³⁵⁾。

「Jerusalem, etudes et reproductions photographiques des monuments de la ville sainte」

4. フランス写真学会創立と Le Gray 「ワックス紙写真」

リール現像所が開設された1851年はまた、その2月にフランス「ヘリオグラフ学会」(Société Héliographique)が創設された年でもある。世界最古の「写真学会」である。この創立運動の中心になったのはB. R. de Montfort大佐で、パリの中心マドレーヌ広場に近い「l'Arcade」街の彼の家が事務所として提供された。週刊の機関誌「La Lumière」は2月9日から発行となり1860年まで続いた。初代会長にはJ. B. L. Gros男爵(1793-1870)が選ばれ、40名の創立委員の中には著名な写真家、科学者、画家などが名を連ねていた。

写真家: Hippolyte Bayard, Gustave Le Gray, Niépce de Saint-Victor, Henri Le Secq, Charles Nègre, Edouard Baldus.

科学者: Edmond Becquerel, H. V. Regnault.

画家: Eugène Delacroix. 銅版画家: A. F. Lemaître.

光学機器商: Charles Chevalier, N. P. Lerebours など

「ヘリオグラフ学会」は1854年11月15日から「フランス写真学会」(Société Française de Photographie)と名前を変え、機関誌「Bulletin」は1855年1月1日から刊行され現在にいたっている。「フランス写真学会」の初代会長はH. V. Regnault(1810-78)で1854年から1868年まで勤めた。Regnaultは1835年ドイツGiessen大学Liebig研究室で有機化学を勉強し、1841年から「Collège de France」物理学教授となった。ここでは同僚の生理学者Claude Bernard(1813-78)の写真を撮ったことがある。ここに13年いて1854年からパリ西郊Sèvres「国立磁器研究所」所長となり1871年まで勤めた。彼は写真にも熱心でJ. Herschelの娘婿John Stewartに写真を教えたことで知られている。Stewart写真集「Souvenir des Pyrénées」(1853)はBlanquart-Evrardリール現像所にプリントを依頼した。Regnaultの専門は膨張係数、蒸発熱、蒸気圧の精密

測定であったが、1870年対プロシア戦争で彼の研究室はプロシア兵に破壊、略奪されたので、これ以後の報告はない⁽³⁶⁾。

フランス「ヘリオグラフ学会」創設の1851年はまた、5月1日から始まったロンドン水晶宮万国博覧会の年でもある。この会場にイギリス写真家 F. S. Archer (1813-57) がコロジオン湿板法で撮ったガラス陰画が展示された⁽³⁷⁾。

カロタイプは紙が支材であるから軽くて廉価だという利点があった。しかし、もともと透明でないから紙の粗さがプリントに出るのは避けられない。たとえ蜜ロウを熱アイロンで浸み込ませても完全には透明にならない。それなら始めからガラス板を支材にすれば良いと誰もが考えるが、問題は感光剤のヨウ化銀をガラス板に付着させる粘着剤 (vehicle) にある。Niépce の遠縁に当たる Niépce de Saint-Victor (以下に Niépce de S-V と略す) は1847年10月25日フランス科学学士院例会で、このガラス写真の試みを報告した⁽³⁸⁾。彼が試験したのは澱粉、卵白、ゼラチンである。そして1848年6月12日発表の「ガラス写真に関するノート」では粘着剤を卵白だけに絞った⁽³⁹⁾。露出は湿った状態で5-15分と長いし、乾燥すると感度が低下して保存が効かなかった。感光剤がヨウ化銀で、没食子酸現像、臭化カリウム定着であったから、この点では Blanquart-Evrard 紙写真とあまり変わらない。

それで自分の方が本家だと言うので、Blanquart-Evrard が次の年1849年8月20日の科学学士院例会で自分の卵白ガラス写真法を報告した⁽⁴⁰⁾。これは Niépce de S-V 法とほとんど同じであった。

こんな状態のところへ1851年になって Archer のコロジオン湿板法が化学雑誌「The Chemist」3月号に発表されたのである。ヨウ化カリウムを溶かし込んだコロジオン液をガラス板の上に均等に拡げ、少しエーテルが蒸発したところで硝酸銀水溶液に浸けあと少し水で洗う。これを「湿ったまま」でカメラに入れて露出し、ピロガロールと硝酸銀を希酢酸に溶かした液で現像する。定着はハイポ水溶液でした。

Archer はこの段階ではまだ Talbot カロタイプに倣って現像液に硝酸銀を加えているが、1854年に刊行した定本「The Collodion Process on Glass」になって始めて、Blanquart-Evrard 法に従って硝酸銀を省い

た⁽⁴¹⁾。乾燥すると感度が急速に低下するから「湿ったまま」で使わねばならない。このため旅行先には暗室テントの携行を必要とした。しかしコロジオン湿板法は支材ガラス板が透明であり、感度のよいこと諧調の表現が美しいことなど利点が多く、「湿ったまま」と言う不便さにもかかわらず、臭化銀ゼラチン乾板が1880年ころから市販されるまで、約30年間写真手法の主流となった。

Daguerre が死亡したのは Archer が最初のコロジオン湿板法を発表した1851年の7月10日である。この年の彼の死は1つの時代の終わりを象徴的に物語る物と言えよう。

フランスでは同じ1851年に写真家 Gustave Le Gray がワックス紙法を発表した⁽⁴²⁾。12月8日科学学士院で読まれた報告「ネガ用写真感光紙の新しい作り方」には、すでに2月25日と11月17日に内容を伏せたままの予告がなされていた。彼の手法は乾式カロタイプ法の変形で、始めから蜜ロウを紙に浸ませるところに特徴があった。

Le Gray は歴史画家 Paul Delaroche (1797-1856) に絵画を習ったが、これでは家族が養えないと言うので de Briges 侯爵の後援を受けて1848年から「Italiens」街に肖像写真館を開設した⁽⁴³⁾。これは有名な Bisson 兄弟の写真館と同じ建物であった。Le Gray はまた写真館を経営するかたわら多くの写真教本を著している。よく知られているのは1850年6月刊行「Traité pratique de photographie sur papier et sur verre」である。彼はこの中で自分のコロジオン法を提案したが、これは現実性のないものとされている。先生の Delaroche は銀板写真年金法案の審査員の1人で、彼が始めて銀板写真を見たときに叫んだとされる、次の言葉はながく記憶されることになった⁽⁴⁴⁾。

「この日から絵画は死んだ。」(Le peinture est morte à partir de ce jour)

Delaroche の弟子たちの中には写真に興味を持つ人が増え、Le Gray が彼らに写真を教えた。この中にはイギリスからきた Roger Fenton (1819-69)、フランス人 Nègre, Le Secq などあとで写真家として名をなした人が多い。Fenton はクリミア戦争(1855-56)に従軍し、その写真集で有名となった。Nadar の弟 Adrien も Le Gray から写真の手ほどきを受けた1人

である。Le Gray の影響のためか、当時のパリ在画家の中には写真に興味を持ち、これを素描に利用した人も多かった。Delacroix, Ingres, Courbet, Degas などがそれである。

中でも Delacroix は写真を「画家の宝物」と呼び、写真が自分の生涯のもっと早い時期に発明されなかったのを嘆いた⁽⁴⁵⁾。

「私の生涯のもっと早い時期に、写真が発明されていたらどんなに良かったろう。」

Delacroix は「ヘリオグラフ学会」創立委員の1人であり、彼の死後カロタイプ写真をもとにした多くのデッサンが、彼のアトリエから発見されたそうである。

Le Gray ワックス紙法の大要は次のとおりである。まず蜜ロウを平皿の中で 100°C に加熱して融かし、この中に紙を浸してから引き上げ、数枚の吸取紙に挟んで上から熱アイロンをかけてワックス紙をつくる。これを重湯（おもゆ）、乳糖、ヨウ化カリウム、シアン化カリウム、フッ化カリウムを含む熱水溶液の中に半時間ほど浸す。乾燥してから硝酸銀の希酢酸溶液に浸け吸取紙の間で乾燥させる。暗いところにおくと 14 日以上も保存できた。現像は没食子酸水溶液（硝酸銀を含む）で、定着はハイポ水溶液でした。露出後の現像は 2 日ほどあとまで延ばせるので便利であった。報告では感度に触れていないが、大体 Talbot カロタイプと同じくらいで、現像に 1-3 時間を要した。この報告の全訳が「付録 3」である。

この 1851 年 12 月報告の最後に「歴史的モニュメント保存委員会」(Comité des Monuments Historiques) についての言及がある。

「(ワックス紙法の) 作業は全く簡単であるから、『歴史的モニュメント委員会』の仕事には、いつも 1 日に 25 枚から 30 枚の処理ができた。」

「歴史的モニュメント委員会」は Francis Wey (1812-82) が芸術院に進言したもので、歴史的に重要な建物やモニュメントなどを、今の内に写真に記録しておこうという企画であった。委員会は 5 人の写真家に委嘱して、1851-52 年夏に撮影させることにした。だから Le Gray の言うように彼の 1851 年 12 月科学学士院報告のときは、すでにかなり撮影が進んでいたのである。5 人の写真家は Le Gray, O. Mestral, H. Le Secq (1818-82), E. Baldus (1820-82), Hippolyte Bayard (1801-87) である。こ

の中で Baldus はカロタイプ, Bayard は卵白ガラス写真を使い, Le Gray を含むあとの3人はこの年に完成したばかりのワックス紙法を使って撮影した。5人にはそれぞれ担当の地域を指定した。たとえば1839年写真騒動の年, Daguerre と写真発明の優先権を争った古参の写真家 Bayard はノルマンジー地方が割り当てられた⁽⁴⁶⁾。ただ残念なことに彼らが撮影した原板, 印画プリントは公表されることなく, いまだにパリ Palais Royal 「Archives des Beaux-Arts」に眠っているのだそうである。

5人の写真家は委員会の仕事のあとも各自で有名な寺院などの撮影をし, これらの写真はあとの修復のときに役に立った。また1860年代の G. E. Haussmann によるパリ市街改造のまえに撮影された写真は, 失われた古いパリ市街のたたずまいを伝える貴重な資料となっている。

Charles Nègre (1820-79) は「歴史的モニュメント委員会」が選んだ5人のなかには入らなかったが, 優れた写真家で絵画を Delaroche と J. A. D. Ingres (1780-1867) に学んだ。Nègre はまたパリ市街で眼に触れる庶民の何気ない暮しを撮影して, これをもとに油絵に仕上げたりしている。袋を担いでセーヌ河畔を歩く3人の少年を撮った「煙突掃除夫」(ワックス紙写真, 1852)⁽⁴⁷⁾, 壁にもたれて手回しオルガンを弾く男と, それを見守る少年とその妹を撮った「手回しオルガン弾き」(カロタイプ, 1851)⁽⁴⁸⁾などがよく知られている。後者は油絵にして1853年のサロンにも出品された。

5. Victor Hugo 「アルバム」と Jersey 島現像所

1848年2月革命のあとの労働者の反乱, いわゆる6月事件は行政長官 L. E. Cavaignac (1802-57) によって鎮圧された。彼の評判はこれで悪くなり, 12月10日の大統領選挙でナポレオンの甥, ルイ・ナポレオン (Louis Napoleon, 1808-73) に破れた。Hugo は始めルイ・ナポレオンを支持していたが, 次第に大統領の自由主義に疑惑を抱くようになった。1851年になってルイ・ナポレオンが大統領再出馬の目的で憲法改正を企て, これを議会にかけるといふ暴挙に出たので, パリ選出上院議員であった Hugo は議会で演説して大統領の野心を攻撃した。軍を掌握したルイ・ナポレオンは12月2日クーデターに打って出て反撃し, Hugo を始めと

する共和主義者を追放した。

Hugo 一家はクーデター前から次男 Charles (1826-71) と三男 François (1828-73) がすでに投獄されていた。クーデターのすぐあと身の危険を感じた Hugo は、印刷工に変装して12月11日ブリュッセルに脱出し、翌年1852年7月ロンドンを経て Charles とともに英領 Jersey 島に到着した。これが8月5日のことで、ここにはすでに妻 Adèle や詩人 Auguste Vacquerie が来ていた。Vacquerie は Hugo の長女 Léopoldie と結婚した Charles Vacquerie の弟である。Hugo 一家は8月16日から海岸に面した「Marine Terrace」に居を定めた。ここには1855年10月になって北の英領 Guernsey 島に移るまで3年を過ごすことになる。ルイ・ナポレオンの方は Hugo が亡命した次の年、1852年1月24日反動的な新憲法を制定して10年任期の大統領となり、12月12日の国民投票で帝位についてナポレオン3世を名乗るようになった。彼は Hugo の首に2500フランの賞金をかけたという。

Hugo には生活を支えるための執筆という仕事があるが、若い Charles や Vacquerie は狭い島での暮しを持て余し、暇つぶしに写真を始めることにした。絵心のある Hugo が彼らに「島の生活」アルバムを作ったかどうかと勧めたのであろう。Charles はすでにカロタイプ紙写真の手ほどきを受けていたが、1853年に島を抜け出してフランス本土ノルマンジー Caen 市の写真家 Edmond Bacot からコロジオン湿板を教えてもらい、これを弟 François と Vacquerie に伝えた⁽⁴⁹⁾。島で手に入らない器材や薬品はフランス本土にいる友人に頼んで送ってもらった。

写真陰画が溜ったので、これを本土の Bacot に頼んで食塩紙や卵白紙に焼付けてもらい、1854年8月から印画をアルバムに貼ってはパリの友人に送ることを始めた。全部で67部は作ったと言うが現在残っているはフランス「Bibliothèque Nationale」とアメリカ「George Eastman House」の Gabriel Cromer コレクションに保存されている2冊だけのようである。Cromer コレクションにあるモロッコ皮表装アルバムは Hugo 夫妻がパリの Euphemie Barbier に贈った物で、表紙には彼女のイニシャルが金で印刻されている⁽⁵⁰⁾。Euphemie は Hugo 一家と同じ家で暮らしていた医師 Barbier 夫妻の娘である。アルバムは39葉で、これに10×7cmのプリ

ント 41 枚が貼られている。写真は 1852 年から 1854 年にかけて撮られた物ばかりで、この中でもっとも有名なのは「巖頭に座る亡命 Hugo」像であろう。いかにもロマン派 Hugo 好みの構図であり、おそらく彼自身が発案した物と思われる。Hugo 像はこれ以外にもあり、これらは島の風景写真と共に Jersey 島での Hugo 一家の暮し向きを教えてくれる貴重な資料となっている。このほかに Hugo らしい構図の作品には、Hugo と Hugo 夫人の左手だけのクローズアップ写真、飼猫「チビ」(Mouche) の写真、海岸に横たわる節くれ立った流木の写真などがある⁽⁵¹⁾。この種の題材は当時の職業写真家があえて取り上げなかった物で、ここにも詩人 Hugo の優れた絵画的才能が遺憾なく発揮されている。

これらの作品は集めて「ジャージー島と海峡の島じま」(Jersey et les Îles de la Manche) の題で Hugo の挿絵と詩、Hugo 兄弟と Vaucquerie の文章をつけて 1853 年に刊行されると写真誌「Lumière」に報じられたが、あとあとまで出版されることはなかった⁽⁵²⁾。

Jersey 島亡命 4 年目イギリス政府から苦情がでて、一家は 1855 年 10 月から北の英領 Guernsey 島に移住させられ、ここでまた 15 年間もの亡命生活を余儀なくされた。もっとも島にばかり籠っていたわけではなく、フランス以外の大陸の諸国にはかなり頻繁に旅行をしている。Hugo が晴れてパリに帰るのはナポレオン 3 世が対プロシア戦争に敗北して失脚する 1870 年の 9 月になってからである。1851 年パリ脱出のとき 49 歳だった Hugo も帰国のときは 68 歳になっていた。

6. Nadar 「写真」の始め

Nadar は「Panthéon-Nadar」のとき似顔絵描きを弟 Adrien に手伝わせた。Adrien にそれほどの絵心がないと見た Nadar は弟に勧めて写真を習わせた。この方が速いと見たのである。先生はワックス写真術 (1851) で名の知られた Le Gray であった。これが 1853 年で、やがて Adrien に「Capucine」街 11 番地に肖像写真館を開かせた。好奇心の旺盛な Nadar のことだから、すぐに自分でもやってみる気になった。友人 Vochette から古い写真機を譲り受けて写真家 Adolphe Bretsch の指導を受けた。Bretsch は引き伸ばし機「メガスコープ」(megascope) の発明で知られて

いた。厳しい先生だったらしく Nadar はその指導ぶりを次のように回想している⁽⁵³⁾。

「毎朝、くる日もくる日も、この無慈悲で頑固な先生は、親指とほかの指のあいだにガラス板を保持する作法を、ある時は30回も続けて練習させました。そのあと、やっと当時の写真草莽時代の習慣にしたがって、さっと一気にコロジオン液をガラス板の上に流すのを許してくれたのでした。」

左手の指に大きな重いガラス板を挟んで、この上に一気にヨウ化カリウムを含んだ粘稠なコロジオン液を流して、均等な厚さの液層をつくるのが難しい。器用な Nadar はすぐに上達したらしい。1854年12月から「St. Lazare」街113番地の家の屋上にスタジオを設けて自分でも写真館を営業し始めた。採光のため当時のスタジオは屋上に設けるのが一般であった。この家には母親も住んでいて、当時のパリには珍しいエレベーターがあって、これでスタジオまで昇れた。Adrien の写真の腕はそれほど悪くなかったが、彼には兄ほどの人間的魅力がなかった。肖像写真を撮るのには腕だけでなく、写し手の人柄が大いに物を言う。こんなことで Adrien の写真館はあまり流行らなかつたから Nadar が手伝わねばならなかつた。

このころ1855年 Nadar は Ernestine Lefèvre と結婚した。1年して一人息子の Paul (1856-1939) が生まれた。

何事も自分の思うとおりにやらないと気が済まない Nadar のことで弟のやり方が気に喰わない。弟はこれに反抗する。こうして喧嘩となり Adrien は2-3人の協力者を誘って1855年1月にはそう遠くない「Italiens」大通り17番地に新しく写真館を開いて独立した。この喧嘩には1855年ブリュッセル写真展に出品して金賞をとった写真も関係している。パントマイム役者 C. Debureau を撮った作品で、多分 Adrien が兄の助言の下に自分のスタジオで仕上げた物であろう⁽⁵⁴⁾。これを Nadar が自分の作品のように言い触らした。

Adrien は独立したものの兄ほどの知名度がないから、写真館の名前を「Nadar-jeune」(Nadar 新館)とした。Nadar はこれに対抗して自分のスタジオの前に「Nadar 写真館はここだけ、支店はありません」と書いて宣伝すると同時に弟を告訴した。この裁判は1856年2月から1857年12

月まで約2年かかってNadarの勝利に終わった。破産したAdrienはパリを引き払い、いろいろな商売をしたが成功しなかった。あとでNadarはこの弟を自分のスタジオで働かせたり、1890年にはその入院費用まで持ってやったりしたが、Adrienは1903年78歳で死亡した。

Nadarの死の7年前である。

1856年Nadarは2番目の著書「私の修行時代」(Quand j'étais étudiant)を刊行し、これを女友達の作家George Sandに捧げた。彼の最初の著作は小説「La Robe de Déjanire」(1845)である。これは4人の学生のボヘミア的生活を描いたもので、あとで有名となるMurger「ボヘミアン生活」(1847)はこのNadarの習作を下敷にした物かも知れない。

この1856年にはNadarが言い出して写真作品を芸術院(Académie des Beaux-Arts)主宰の官選サロンに出品させるようにと運動した。7人委員会がこれを審議することになったが、委員の中で写真好きのDelacroixやGautierはNadarの主張に賛成であった。その結果、1859年から写真作品もサロンに展示される運びとなった。ただし会場への入口は別である。詩人Baudelaireは2年前に発表した詩集「悪の華」(Les fleurs du mal)で名を挙げていたが、犀利な美術評論家でもある彼は写真の芸術性に疑問を抱いて、次のように危惧の念を表明した⁽⁵⁵⁾。

「しかし、もしそれ(中崎注:写真)が微妙で感知できない領域とか、想像の領域とか、とにかくその価値が人間の魂に何を付け加えるかによって判断されるような領域に進入してきたら、それはわれわれの害になるだけのことだ。」

ただし彼はこの批評を初めての「写真サロン」出展作品を見ないで書いているのである。

なんにでも手を出すNadarは1856年蓄音機の一つ「音響ダゲレオタイプ」(daguerreotype acoustique)のアイデアを提出した。彼はまた気球からの空中撮影を試み始めた。もともとフランスは1783年Montgolfier兄弟の熱気球、Charlesの水素気球による飛行から始まって気球研究が盛んな国柄であったが、Nadarはこれと反対に「空気より重い機械による飛行」の開発に興味を抱いていた。しかし、この実現は困難だから差し当り水素気球を使ってパリ市街の空中写真を撮ることを企てた。いかにも冒険

好きで目立ちたがり屋の彼らしい計画であったが、これはまた彼の写真館の宣伝にも役立てる、よく計算された企画でもあった。

試験撮影は1855年から始めて数回試みたが、いつもコロジオン湿板にカブリが出て不成功に終わった。これが1858年冬パリ郊外 Petit-Bicêtre 村での撮影のとき失敗の原因が分かった。前の日も失敗で次の日の朝、いつもと違ってバルブ締めたままで上昇し80m上空から撮ってみた。夜の間に冷えて気球が収縮していたのでバルブを締めて上昇したのである。現像してみると印像は微かであったがカブリはなかった。バルブを開けて上昇すると水素ガスがバルブから噴出する。このころ水素ガスは希硫酸に鉄屑を投げ込んで発生させたから硫化水素が不純物として混入するのは避けられない。この硫化水素がコロジオン湿板の銀塩と反応してカブリを与えていたのであった。原因が分かったもののNadarが450m上空の係留気球からパリ市街を撮影して成功を収めるのは1862年になってからである。友人の画家 Daumier は写真嫌いで知られていたが、この快挙を漫画にして「Nadar は写真を芸術の高みにまで揚げた」とキャプションをつけて石版に刷った(1862)⁽⁵⁶⁾。石版画は「PHOTOGRAPHIE NADAR」と大書した小さなゴンドラに乗ったNadarが三脚に載せたカメラで下界を撮っている図柄で、彼のシルクハットが風で飛ばされている。下に見えるパリ市街のあちこちには「PHOTOGRAPHIE」という看板が屋上に掲げられている。これは絵空事でNadarは Dallmeyer カメラを使い、これをゴンドラの横に結び付けて使用した。しかもコロジオン湿板は湿ったままではないといけなから、ゴンドラには暗室テントを持ち込んでこの中で湿板の感光化や現像までしたから大変である。Nadarは1858年10月に空中写真の特許までとった。1859年イタリア遠征のときナポレオン3世はNadarに5万フラン出すから戦場の空中写真を撮るように頼んだ。

共和主義者のNadarはこの申し出を断わった。

アメリカでは少し遅れて1860年10月13日ボストン市 Samuel A. King が写真家 W.Black と係留気球「Queen of the Air」号に乗り、360m上空からボストン市街と港の写真を撮るのに成功した⁽⁵⁷⁾。ただし硫化水素によるカブリが多くて、8枚のうち1枚だけにしか写っていなかった。それでも写真好きのハーバード大学教授 Oliver Wendell Holmes (1809-

94) はこれを「鷺や雁が見るボストン」だと褒めた。

新しいもの好き Nadar はまた別の奇抜な試みでパリ市民を驚かせた。もちろん宣伝の目的でもある。これは、あまり人の入ったことのないパリの下水道、地下墓地の写真を電気アーク灯による照明で撮る試みであった。スタジオの中なら Nadar は 1859 年に電気アーク灯で肖像写真を撮っている。50 個のブンゼン電池を連結して電気アーク灯を点け、この光で助手の写真を撮ったところコントラストが強すぎて、骸骨の写真のような物となった。それで正面からの照明以外に補助の照明が必要だと悟り、反射鏡やスクリーンを試みて成功した。こんな経験のあと 1861 年になって大勢の助手を使い、長い電線をひいてパリ下水道と地下墓地の写真に挑んだのである。このときも空中写真のときと同じで不測の事故に悩まされた。思いがけないときに、思いがけないところから風呂の湯が吹き出して、そこから一面が曇ってしまったなどである。地下では照明を使っても 18 分もの露出を必要としたから、骸骨を運ぶ人夫の撮影にはダミーとして人形を使わざるを得なかった⁽⁵⁸⁾。3 ヶ月の苦勞の末、100 枚のネガをパリ市役所に納めることができた。これは最初の地下撮影だと言うので 1862 年ロンドン国際写真展に出品して評判となった。

7. Capucine 街 35 番地「Nadar 写真館」

Nadar 写真館は大成功で繁盛したので、開店してから 5 年もしないのに Nadar はこの儲けた金を元手にもっと大きなスタジオに移転することにした。場所は弟 Adrien に店を持たせてやったと同じ Capucine 街で 35 番地、オペラ座とヴァンドーム広場の中間に位置していた。パリの中心街で目抜きの場所である。これが 1859 年暮れで、これから 1875 年ころまでの約 15 年間は Nadar の全盛期と言えるだろう。40 歳から 55 歳まで彼の壮年期にあたる。この建物は 4 階建てで、4 階は天井が高くガラス張りのスタジオになっていた。Nadar は赤髪、赤ひげ、おまけに共和主義者だったから赤色を好んだ。このため建物の正面を全面にわたって赤く塗り、内部の壁も全て赤にした。3 階と 4 階の間の正面には Nadar 独特の署名スタイルをそのままに書いた大看板「NADAR」を掲げ、夜間にはガス灯で赤く輝くようにした。Nadar 自身は赤い衣装を着て客をサロンからスタジ

オへと案内した。

サロンは所狭いまでに高価な家具や骨董品で飾られていた。

このころパリでは名刺写真「カルト・ド・ヴィジート」(carte-de-visite)が流行していた。これは1854年11月フランス人André Adolphe Disdéri (1819-90)が特許を取った小型の肖像写真である。5.7×8.9cmであるから名刺の大きさその物であった。始めは名刺代わりに写真を使うというアイデアであったが、やがてこれを交換し収集してアルバムに貼るようになって流行し、フランスから始まってイギリスでも爆発的な大流行を見た。当時の肖像写真のサイズはふつう20×25cmほどで、この値段が1枚50から100フランもしたから高価であった。しかし名刺判写真ではこれと同じ大きさのコロジオン湿板のうえに12枚もの写真が撮れた。値段は12枚で20フランほどが相場であった。流行の熱は10年ほど続き、最盛期にはイギリスで年間400万枚も売れたという。

Nadar「私が写真家のころ」(1900)によると、パリでの名刺写真の流行はナポレオン3世の気紛れで加速されたらしい。1859年イタリア遠征のときナポレオン3世は途中Disdéri写真館に寄って写真を撮らせた⁽⁵⁹⁾。

「ナポレオン3世がイタリア戦線に向かう軍隊の先頭に立って大通りを行進しているときに、写真を撮らせるためにDisdéri写真館のまえに急に立ち止まった(このちょっとした行為は、これだけでも彼の写真そのものより本人により似てはいないだろうか?)。このため全軍は待たされた。隊列は銃を手にしたままその場にとどまり、写真家が皇帝の写真を撮るまで待った。この行動からDisdériに対する評判はたちまち熱狂とかわり、全国が彼の名前と写真館の住所を知った。」

Disdériはこのあと数年の間にフランスの各地に支店を開いた。パリ本店では90人もの助手を雇い、1日に200人の写真を撮った。だから焼付けは1日に2400枚で、これを2日で仕上げて顧客に手渡した。

Nadarは名刺写真は助手に委せて、自分は有名人を顧客にして従来どおり大型の肖像写真を撮り続けた。彼はイギリスのCameron夫人と同じように「人物の精神」と撮ろうと苦心している。次に引用するのは弟Adrienとの裁判におけるNadarの証言である⁽⁶⁰⁾。

「写真の理論なら1時間で、実技の基礎なら1日で習えるでしょう。」

「しかし習えないのは照明のセンスです。いろいろな明るさとその組合せの結果、それらを芸術家である君の前にある対象物に応用する術(すべ)は習えません。さらに習い難いのはその人物の精神の把握です。モデルに出会ったとき瞬時にこれを理解することは、モデルの癖、考え、そして性格を纏めるのに役立ち、これが心の通った肖像写真を作らせるのです。これは写真場の助手でも撮れる、いい加減で出まかせの、どうでもよいような写真ではないのです。」

彼は風刺漫画家のとき人物の特徴を掴む訓練を積んでいた。これが写真で役に立ったのであろう。同じことは銀板写真時代から活躍している Étienne Carjat (1828-1906) についても言える。Carjat も漫画家出身で彼の撮った詩人 Baudelaire の肖像写真は有名である。写真の腕はあるいは Carjat の方が、Nadar より優れていたかも知れないと言われている。

Nadar はこうして撮った有名人の肖像写真を集めて、あとで写真アルバム「Galerie Contemporaine」として刊行した。ナポレオン3世帝政時代の多くの作家、画家、音楽家、俳優が網羅され、その人びとの個性が画面から溢れ出ていて壮観である。Nadar が後世に残した最大の遺産といっても言い過ぎではないだろう。Nadar はスタジオで撮る肖像写真に専念して、外に出て風景などを撮ることは全くと言ってよいほどなかった。あとで息子の Paul は「ベル・エポック」美人の写真を多く撮って評判になったが⁽⁶¹⁾、Nadar 自身は女性の写真をほとんど撮ってはいない。「どんなに美人でも自然のままに撮れると喜ばない」からであった。例外は1862年に「Comédie Française」劇場からデビューして大女優になった Sarah Bernard (1844-1923) の若いころの写真⁽⁶²⁾、友人の女性作家 George Sand⁽⁶³⁾ それに Christine Roux くらいである。この Roux はあとで Puccini 歌劇「La Bohème」に仕立てられた Murger「ボヘミアン生活」の女主人公「Musette」その人だと言われている。Nadar はモデルであった彼女の裸体写真を撮っているが、これは Ingres「泉」(La Source) (1856) と構図がよく似ていてその原型ではないかと信じられている⁽⁶⁴⁾。

Capucine 街 35 番地「Nadar 写真館」は繁盛し、そのサロンは場所も便利だから多くの作家、画家、音楽家、俳優の溜り場となった。Nadar は撮影料をその場で即金でとった。それが1人50フランから100フランの高

額であったから、ポケットのフラン金貨の重さで背中が曲がったと噂されたほどである。Nadar 写真館詣でをしたのはパリ人ばかりではない。パリを訪れる外国からの貴顕紳士は一度は Nadar 写真館に顔を出した。

このころパリを訪れ始めた江戸幕府派遣の訪欧使節も例外でない⁽⁶⁵⁾。

文久2年(1862)竹内下野守遣欧使節に加わった38名の中には万延元年遣米使節で渡米した人が6名いたが、別艦 咸臨丸で行ったのは福沢諭吉1人である。竹内使節の一行には通詞として福沢の他に福地源一郎(桜痴)、箕作秋坪、松木弘安がいた。箕作と松木は医者を兼ねているから2人とも坊主頭である。一行がマルセイユに上陸してリヨン経由でパリに到着したのが文久2年3月10日で4月1日まで滞在した。松木はおそらく友人の福沢や箕作を誘って「Nadar 写真館」を訪れている。写真館は使節一行の泊まった「Hôtel du Louvre」からそう遠くはない。

このときスタジオで、あとの外務卿 寺島宗則である松木が書いた文字が Léon de Rosny (1837-1916)「日本文集」(Anthologie japonaise, 1871)に残っている⁽⁶⁶⁾。

「写真術は造物者の畫にして光輝はその筆なり。」

Rosny (羅尼)は日本語をほとんど独学で覚えた「日本狂」で福沢とは仲がよく、福沢の「西航記」「西航手帳」の中によくその名が見える⁽⁶⁷⁾。

松木は鹿児島にいたとき、島津斉彬のために蘭書から写真術のところを翻訳などしたことがあったから、余計にその進歩に感銘を深くしたのであろう。福沢にとって写真は珍しくない。昨年、万延元年に咸臨丸でアメリカに行ったとき、彼はサンフランシスコ「Shew 写真館」で写真館の1人娘「ドーラ」(Theodora Alice Shew)と一緒に写真を撮っている。

このときの写真はいわゆる「アンブロタイプ」(ambrotype)と称するもので、コロジオン法ガラス写真の裏を黒くして陰画を陽画としてみるタイプであった。

使節の訪れた1862年はNadarが「Capucine」街35番地に写真館を移してから2年ほどしか経っていない。好奇心の強いNadarの事だから、いまパリ中の評判になっている日本人使節のおおされたサロンに、顔ぐらいは出したかも知れない。

次の年、文久3年(1863)は池田筑後守一行がまたパリにやって来た。

一行は3月13日パリに着いて竹内使節と同じ「Hôtel du Louvre」に宿泊した。フランスには5月20日までいたが、この間に使節の随行員が「Nadar 写真館」で撮らせた写真が残っている。組頭 田辺太一、通弁 尺振八、理髪師 乙骨 亘（オッコツ ワタル）のものである⁽⁶⁸⁾。乙骨は綱二（ケイジ）とも言った。彼は漢学者乙骨耐軒の次男で理髪師と言うのは仮に参加資格をつくらせた物に過ぎない。乙骨は帰国してから上田東作の娘 孝子（コウコ）の婿として上田家の養子に迎えられた。上田東作は前年の竹内使節一行に上田友助の名前で参加していた。この上田家への入り婿 綱二と孝子との間に生まれたのが上田 敏（1874-1916）である。敏は明治40年（1907）東京帝国大学講師のとき私費でアメリカを経てヨーロッパへ遊学をした。パリに着いたのが明治41年春である。ここでは40年もまえに祖父や父親が泊まったとよく似た名前の「Grand Hôtel du Louvre」に宿泊した。そして「Nadar 写真館」を訪ねて、ここで父親「乙骨 亘」の写真を見せられたらしい。こんな事が分かるのは森 鷗外がパリ在の上田 敏に書いた明治41年4月25日付けの手紙が残っているからである⁽⁶⁹⁾。鷗外の手紙は「Grand Hôtel du Louvre, 48 rue des Bernardins, Paris, France」上田 敏宛になっている。

「拝啓 四月四日の御書状到着いたし候。御父上の写真に御逢いなされ候由 好逸話と存じ候。」

この写真は「四切」サイズ（25×30cm）鶏卵紙焼付けである。

1863年撮影でおそらく助手が撮った物であろう。しかし、珍しい日本人使節の写真撮影と言うので、Nadarがスタジオに入って少しは口出しした可能性もある。

敏が訪れた1908年Nadarは88歳になり、さすがの彼も衰えは隠せなかったから、敏（34歳）と対応したのはあるいは息子のPaul（52歳）だったかも知れない。両方とも息子の時代になっているのである。

8. 「Géant」気球飛行と対プロシア戦争「鳩通信」

1863年（文久3年）上田 敏の父親 乙骨綱二が「Nadar 写真館」で写真を撮ってもらっていたころ、この写真館は別の活動の中心になっていた。「空気より重い機械による飛行」推進協会の本部である。Nadarが身を

入れている協会の総務は科学冒険小説家 Jules Verne (1828–1905) が引き受けてくれた。Verne は気球飛行に熱心で、この年に「気球の5週間」(Cinq semaines en ballon, 1863) を書いている。推進協会の例会は毎週金曜日「Nadar 写真館」で催し、機関誌「L'Aéronaute」印刷の費用は全額 Nadar が支払った。この機関誌や推進協会の事業を宣伝するために、Nadar は彼らしく派手で奇抜なアイデアを計画した。従来の気球の3倍も大きい巨大気球「Géant」号を飛ばして世間をアッと言わせようというのである。設計、建造は Eugène Godard (1827–90) が請負い、これを6週間で完成し10月には「Champ de Mars」公園に据えた。

1889年パリ万国博覧会で「エッフェル塔」が建つ場所である。気球その物は直径30mほどで、これをNadarの好みの真紅に塗った。それより人を驚かせたのはゴンドラである。バスケット編みの高さ4m、2階建の構造で80人が収容できた。ゴンドラの中には4つのベッド、便所、暗室が設けられ石版プレスまでが備えられていた。これは飛行の記事をビラに刷って地上に撒くための用意である。ゴンドラは車輪をもち馬車として運搬できるようになっていた⁽⁷⁰⁾。

10月4日最初の飛行にはNadarと操縦士Godard兄弟をいれて全員15名が、各人1000フランを払って乗り込んだ。10万人の見物人が見守るなか、午後5時に出発して5時間の飛行ののちパリ東45kmのMeauxに真夜中に到着した。2週間あとの10月18日にはもっと遠くへ飛んでみることにした。このときはナポレオン3世も出発を見学した。乗員はNadar, Nadar夫人, 息子Paul(7歳), 操縦士Godard兄弟を加えて9名であった。このときは南風が激しく17時間も飛行してドイツHanover地方に着陸した。風が強いので10mジャンプを数回繰り返し1kmほど引きずられてやっと着陸できた。ゴンドラが大破したのはもちろんだが、Nadarは足の骨を折りNadar夫人も負傷した。しかし各方面から同情が寄せられ彼の名前が国際的に知られたことと、Nadarがかねて主張していた気球飛行の危険性が証明された点では成功とも言えた。Hanover女王はNadar夫人に花と果物を送って見舞い、息子のPaulには宮中に泊まるように言ってくれた。またGuernsey島のHugoからも帰りに島に寄るようにとの便りがあった。Hugoは大作「レ・ミゼラブル」(Les misérables)

を完成したばかりの時だったので、集まった人は Hugo と Nadar を囲んで祝杯を挙げた。気球「Géant」のこの度の飛行での出費が大きいことを知った Hugo は 300 フランを贈って援助を申し込んだ。

Nadar はこの好意を断わっている⁽⁷¹⁾。

「頼むから止めにして下さい。私はいま空中でも地上でも全く失敗しております。しかし、私のために人類愛など押し付けるのは私を恥ずかしめることになります。私はまだ死んではいませんし、私はいつもファイターでした。まだ望みはあります。最初の戦に勝ったら、あなたのところに来て言うでしょう『さあ一緒に進みましょう。』」

パリに帰るとき Nadar は Hugo の禁書「小ナポレオン」(Napoléon le petit, 1852) と「懲罰詩集」(Les châtiments, 1853) 39 冊を気球の外布に隠して持ち帰った。また島では Hugo の写真も撮った。Nadar びいきの Verne は 2 年後に書いた「月世界旅行」(Voyage de la terre à la lune) の主人公の名前を Ardan 船長とした。「Nadar」のアナグラムである。さらに 10 年後の 1873 年にはよく知られた気球飛行物語「80 日間世界一周」(Le tour du monde en 80 jours) を完成した。Nadar は「Géant 飛行」報告をフランス各地、イギリスで公演して回ったが、これだけでは巨大な出費を償えず、彼は永くその借金の返済に苦しんだ。

1867 年に友人 Baudelaire が 46 歳で死んだ。かねてアヘン中毒だった彼は、ブリュッセル滞在中に発作で倒れ、あの華麗な言葉の魔術師が失語症で言葉を失った。俠気のある Nadar は孤独で惨めな Baudelaire を見舞い、汚れた手を石鹸で洗ってやった⁽⁷²⁾。こんな事が分かるのは Nadar が 40 年も後に書いた「親友ボードレール」(Charles Baudelaire intime, 1911) があるからである。ただし、この中の Baudelaire に対する Nadar の批評はかなり手厳しい。Nadar の俠気は他の友人にもおよんでいる。若いときからの友人である作家の Murger の死 (1861) と、画家 Constantin Guys の死 (1892) のときにも援助を惜しまなかった。一時はあれほど持てはやされた風刺画家 Daumier も晩年は忘れられ、そのうえ 1875 年には失明という不運に見舞われた。住む家もなく画家 Jean Corot (1796-1875) の世話になるほどの貧困だった。1879 年 2 月彼の寂しい葬列 (1879) には Nadar を含めて数人しか加わらなかったと言われている。

Nadar はあとで Guys と Daumier のために回顧展を開いてやった。

1870年7月19日ナポレオン3世がプロシアに対して宣戦を布告した。ライン左岸割譲、スペイン王位継承問題など、ことごとくプロシア政府に反対されて自分の帝政の傾きを知らされた皇帝は、賭に出てその劣勢を一挙に挽回しようと図ったのである。そしてプロシア首相 Bismarck (1815-98) と参謀総長 Moltke (1800-91) とが仕掛けた、いわゆるエムス (Ems) 電報の罠にかかった。フランス軍は敗退を重ね、救援に向かった皇帝まで9月2日 Sedan で捕囚となる有様で、彼はとうとう4日に退位を余儀なくされた。プロシア軍は9月18日からパリ包囲戦を開始した。

これよりさき8月18日に Nadar は2人の友人と図って「気球隊」(Campagnie d'Aérostiers Militaires) を組織した。気球から敵情を偵察する目的で、気球の操縦と建造は Godard 兄弟が取り仕切った。係留場所は新しくパリ市長になった George Clemenseau (1841-1929) がモンマルトルに世話してくれて、ここに2台の古い気球を据え隊員はそばのテントで寝ることにした。これらの費用はすべて Nadar が私費でまかなった。1日に数回は上昇したが、秋の霧に妨げられて視界が効かず、偵察の目的は思うように達せられなかった。そのうちにパリ封鎖が迫ってきたので、気球を外部との連絡に使うことにした。新しい気球の完成が間に合わないから、友人 C. J. Duruof (1841-99) の持っていた気球「Neptune」号を借りることにした。これに手紙3袋と Nadar がロンドン「Times」紙に宛てた手紙を積んだ。9月23日払暁に出発して3000m上空に達し、途中プロシア軍から狙撃されたが、数時間の飛行でノルマンジーに到着した。Nadar の手紙は9月28日付「Times」紙にフランス文のまま掲載された。

「プロシア軍と戦ったのは皇帝の軍隊であって、フランス民衆はこれと関係ないのだ。プロシア軍はパリを攻撃してフランス人民を傷つけてはならない。」

これが世界最初の航空便だと言われている。

やがてパリ郵便局でも気球の重要性を認めるようになって、新しく3台の気球がこれに加わり定期的に飛ばすことになった。これらには Nadar の旧友の名前がつけられた。「Armand Barbès」号、「George Sand」号と「Vitor Hugo」号である。Hugo を乗せた列車はすでに9月5日パリ北駅

に到着していた。パリ陥落が迫り L.Gambetta (1838-82) とその友人 E. Spuller (1835-96) の 2 人は、10 月 7 日に気球でパリを脱出し 200km 南の Tours 政府代表部と合流することになった。このとき彼らが使ったのは、この新しい気球「Armand Barbès」号で Nadar が 2 人を見送った。

このような気球による外部との連絡以外に、伝書鳩を使う通信が 9 月 10 日からすでに行われていた。気球飛行は風任せで正確に目的地につくと言う保証がなかったからである。

始めは薄い紙に書いた手紙を伝書鳩に運ばせた。ところが途中で鳩がプロシア軍に狙撃されたり、鷹に襲われたりして手紙が失われた。そのため手紙の写しを何枚もつくり、これを数羽の鳩に運ばせた。しかし、これでは写しの過程で誤りが発生するうえに時間がかかる。それなら写真を利用すればよいと誰もが考える。まず手紙を 4×6cm ほどのコロジオン湿板に撮って、これを薄い印画紙に焼付けてから伝書鳩に運ばせた⁽⁷³⁾。約 300 分の 1 の縮小である。パリから Tours 政府への通信には東風を利用して気球が主に使われたが、Tours 政府からパリへの手紙は狭いパリ市内に正確に到着する必要があるから、これには伝書鳩を使った。11 月から定期的に伝書鳩便のサービスが開始された。最大 20 語までの通信文を、1 語 20 サンチームの料金で引き受けた。

気球による航空便に先鞭をつけた Nadar が今度はこの伝書鳩通信に新しいアイデアを提供した。現在の言葉で言うと「マイクロフィルム」にして運ばせたらよいと言う案である。そして彼はパリにいる専門家 René Dagron (1819-1900) を推薦した。このマイクロフィルムの考えは 20 年もまえに John Herschel がロンドン週刊誌「Athenaeum」1853 年 7 月 9 日号に提案していた。パリ政府は Nadar の提案を受け入れて、新しく建造した 2 台の気球で Dagron と 2 人の助手を Tours へ送ることにした。Nadar らしくこれらの気球は「Niépce」号、「Daguerre」号と命名されていた。Dagron と助手はマイクロ写真器材とともに「Niépce」号に乗った。風の向きが悪くて 2 台の気球ともプロシア軍占領地域に流された。「Daguerre」号の方は銃撃により撃ち落とされたが、Dagron らの乗った「Niépce」号の方はなんとか撃墜を免れた。Dagron 一行は器材を車に積んで、これをブドウ酒だと偽って占領地を通過して 11 月 21 日に Tours に

到着した。やっと着いて試験してみるとマイクロ写真法はかえって手間がかかり不便だと言うので、これは止めて従来の方法を続けることにした。ただ印画紙に焼付ける代わりに、コロジオン膜に焼付ける改良法を採用した。通信文は平均14語ほどで、この約200通を1枚の紙に収めた。この紙を10枚ほど纏めて全体を4×6cmのコロジオン湿板に撮影した。この陰画をさらに同じ大きさのコロジオン湿板に焼付けて陽画とし、このうえに厚くコロジオン液を塗ってから、これを水に浸けて陽画コロジオン膜をはぎ取った。陽画コロジオン膜には1枚で約2000通、約3万語の通信文が記録されていることになる。陽画コロジオン膜は15枚をまとめて巻いて、これを鳥の羽でつくった筒に入れて伝書鳩の羽に取り付けた。2000通の手紙を入れた筒の重さは1グラムもなかったという。

伝書鳩は途中でいろいろな事故にあい、平均5%しかパリに到着しなかったそうである。それでパリから来る気球に乗った連絡員が無事に到着したと報告するまで、おなじ通信筒を繰り返し伝書鳩に運ばせた。パリ攻城戦は1870年9月から翌年の2月まで続いたが、この間に伝書鳩がToursからパリに運んだ陽画コロジオン膜の数は250万枚に達したと言う。1870年12月10日Tours政府はさらに南方のBordeauxに移った。パリから500kmも離れている。Dagronが次の年、1871年1月18日に伝書鳩便でパリに薬品を注文したところ、これが20日にパリに着き、気球便で薬品がBordeauxに届いたのが27日だと言うから大変に能率的であった。

パリに着いた通信筒の中の陽画コロジオン膜はこれを水に浸けて伸ばし、2枚のガラス板に挟んで幻灯機でスクリーンに投射して読んだ⁽⁷⁴⁾。始めは書き写していたが、やがて引き伸ばし機で印画紙に焼き付けるようになった。しかし、この伝書鳩通信もながくは続かなかった。1871年1月5日からプロシア軍のパリ市内砲撃が始まり、2月26日には仮講和条約が締結された。プロシア軍のパリ入城は3月1日に行われた。パリ市民は過激派L. A. Blanqui (1805-81)らに指導されて国民軍を組織した。3月26日にはパリ・コミュン議会の選挙があり、4月2日からパリ国民軍と行政長官L. A. Thier (1797-1877)の率いるヴェルサイユ政府軍との戦闘が始まった。Nadarはコミュンびいきであったが戦闘には加わらず、14

歳の息子 Paul が伝令兵としてコミューンに参加した。やがてコミューン軍は敗退し、5月21日から28日にかけて政府軍によるコミューンの肅正が始まった。「血の週間」である。3万人が銃殺されたと噂された。

画家 Gustave Courbet (1819-77) はコミューン議会から芸術委員長に任命されたが、そのため5月16日に遂行されたヴァンドーム広場のナポレオン1世円柱破壊の罪に問われて、1873年になってからスイスに逃亡した。彼は故郷の地を踏むことなく1877年レマン湖畔で死亡した。

Nadar のコミューン・シンパは世間に知られていたから、「血の週間」に政府軍から狙われたに違いないが、彼はなんとか逃げおおせた。しかし Nadar の損失は大きかった。気球「Géant」号飛行とパリ「気球隊」への出費が巨大だったのである。しかしパリがコミューンの破壊から比較的早く復興したと同じように、「Nadar 写真館」がもとの繁栄をとりもどすのも早かった。と言っても負債が大きいのので Capucine 街 35 番地「Nadar 写真館」は維持できず、これは人に貸すことにして自分は、そこからそう遠くない「Anjous」街 51 番地に新しい写真館を開いて、息子の Paul と経営に当たることにした。経営方針には息子の意見を入れ、以前と違って商業主義に徹するように務めた。

9. 印象派画家たちと Nadar, Zola との関係

Edouard Manet (1832-83) が1863年官選サロンに出した「草上の昼食」(Le déjeuner sur l'herbe) は落選の憂き目にあった。この年は落選が多くて1861年の入選1289点と比較しても、この年の入選988点は極端に少なかった。不平が多かったのでナポレオン3世が仲に入り5月15日「落選展」(Salon des refusés) を開かせることにした。「落選展」には7000人もの見物人が詰めかけたが、やはり Manet 「草上の昼食」に悪罵が浴びせられ、スキャンダルの中心となった。裸体と言えは神話伝説の女神かニンフと決まっているところへ、裸体の現代風の美人が洋服を着た男たちと森の中で談笑しているのが、見るからに淫らで風俗を乱すと非難されたのである。同じ悪評は1865年出品「オランピア」(Olympia) にも集中した。これに対して新進の美術批評家 Émile Zola (1840-1902) が評論紙「L'Événement」に論文を書いて Manet らの新しい運動を援護し激励

した。

「L'Événement」紙は1848年にVictor Hugoが創刊した新聞である。

Zolaはその名の示すとおりイタリア系で土木技術者François Zolaの長男として1840年パリに生まれた⁽⁷⁵⁾。少年時代をパリで過ごしたが、12歳のときプロヴァンスのAix市ブルボン中学校に入り、ここで1歳年上のPaul Cézanne (1839-1906)と親しくなった。Cézanneはこの土地の生まれで、彼が晩年に好んで描いたサン・ヴィクトワール山は少年時代の彼らに馴染みの風景だったのである。Zolaがブルボン中学校にいたのは1858年までで、この年彼はパリにいる母と一緒に暮らすことになり、3月からサン・ルイ中学校に入学した。このあとZolaは暑中休暇でよくAixを訪れ、ここで昔の友達Cézanneとの旧交を温めた。

Zolaは始め父のあとを踏むつもりで工科志望であったが、理科大学の入学試験に失敗して方針を変えた。22歳、1862年からHachette出版社で編集の手伝いを始め、やがて劇評、美術評論、短編小説などに手を着けるようになった。Cézanneもパリに出てきたが1863年の美術学校入試に失敗した。しかし、この年の「落選展」のManet「草上の昼食」や、1865年「オランピア」を見てから新しい絵画の傾向に目覚めた。しかし、相変わらず1867年サロン出品の絵は選にもれた。この1867年はパリ万国博覧会の年である。この博覧会の「日本館」に始めて江戸幕府や薩摩藩が出品し、将軍徳川慶喜の弟 徳川昭武 (14歳) が幕府を代表して出席した。この博覧会にもManetの作品はそのスキャンダル性のためか展示されなかった。Zolaはまた評論を書いてManetの擁護にまわった。このころからCézanneはAuguste Renoir (1841-1919) やA. Sisley (1839-99) など新進の画家と知合いになった。

Zolaの方は1866年(26歳)Hachette社を辞めて評論、創作に専念することにした。画家や小説家の仲間に多くの知合いができて自立する確信を掴んだのである。このころの彼と画家たちの交流はH. Fantin-Latour (1836-1904)の描いた大作「バティニョールの画室」(L'Atelier des Batignolles, 1869)に見ることができる⁽⁷⁶⁾。これは「Batignolles」街にあったManetのアトリエ風景を描いたものである。左側にZolaの横顔を描いているパレットを持ったManetが描かれ、右側にはそれを眺めている

Renoir, Claude Monet (1840-1926) らが描かれている。Manet「エミール・ゾラの肖像」は1868年のサロンに出品された⁽⁷⁷⁾。この作品ではZolaの左側に花鳥画の日本屏風があり、背後の額には浮世絵の角力絵とManet「オランピア」の複製が入れてある。

1870年Zolaは5年越しの交際だった1歳年上のAlexandrine (1839-1925)と結婚した。

プロシア戦争やコミューンの争乱が終結したころから、Monetを中心に現在の官選サロンのあり方に不平を抱く画家たちが、自分たちの新しい絵画展の準備を計画し始めた。彼らはManetのアトリエのある「Batignolles」街のカフェ「Guerbois」に集まって相談した。Monet, Manet, Renoir, Cézanne, Camille Pissarro (1830-1903) それにEdgar Degas (1834-1917) などである。かれらのスローガンは「無審査, 入場無料」であった。おとなしいManetは過激な運動に反対したが、Monetがその反対を押し切って展覧会を開くことにした。それもパリの中心街がよい。

彼らは現在使われていないCapucine街35番地「旧Nadar写真館」に眼をつけた。Nadar自身はどちらかと言うとアカデミー派だったが、何事にも反体制派に味方するNadarは彼らの運動に協力して2階を会場に貸してくれた。会期を4月15日から5月15日の1ヵ月と決め、朝の10時から夜の10時まで開いて入場料は1フランとした。展示された作品は165点であった。Cézanneは「首吊りの家」ほか3点を出品した。これらの中で人の眼を奪ったのはMonet「印象：日の出」(Impression: Soleil levant) (50×65cm)であった。

その荒あらしいタッチと、過激な色彩は人びとを驚かすに十分であったが、これは同時に人びとの嫌悪をも買った⁽⁷⁸⁾。

女流画家Berthe Morisot (1841-95)はManetの弟を結婚し、あとでManetのために多くの作品のモデルになったが、この第1回印象派展に作品を出品した。彼女の作品を見た友人が彼女の母親に次のような警告の手紙を書いた⁽⁷⁹⁾。

「例のNadarの展示場を見ましたので、すぐに私の素直な意見をお知らせしたくて手紙を差し上げます。ねえ奥様、部屋に入りこの嫌らしい雰
囲気の中でお嬢様の作品を拝見したときはガッカリいたしました。私は

呟きました『危険を覚悟の上になれば、こんな気違いとは付き合いできませんね。』』

しかし Monet は自分の絵の題「印象」どおりに、自分たちの新しい立脚点を世間に印象づけるのに成功した。やがて人びとは彼らを「印象派」(impressionistes) と呼ぶようになった。

10. Zola と彼の写真趣味

Cézanne が印象派のまわりをうろついて、まだ自分自身の道を模索している間に、Zola の方は 1877 年「居酒屋」(L'Assommoir) で一躍、文壇に自然主義作家としての地位を確立した。これは彼の「ルーゴン・マッカール」(Les Rougon-Macquart) 叢書の第 7 作である。Hachette 社を辞めた Zola は 2 年して野心的なこの叢書を構想した。1 人の女が健康な農夫と酒飲みの密輸業者と結婚して 2 つの家系が生まれる。この 2 家系が辿る運命の展開をナポレオン第 2 帝政を舞台背景にして追跡しようと言う壮大な計画であった。始めは 1 年に 1 作の割で全 10 巻 10 年計画の予定であったが、結局 25 年かかって 1893 年 (明治 26 年) 全 20 巻として完成した。必ずしも始めから成功したわけではないが、この第 7 作「居酒屋」は Georges Charpentier (1848-1905) 出版社から刊行されて記録的に売れた。Charpentier は親の代からの出版業で、その夫人の主宰するサロンはパリでも有名であった。画家 Renoir とも親しくて、Renoir 作「シャルパンティエ夫人像」(1877)、「シャルパンティエ夫人と子供たち」(1878)⁽⁸⁰⁾ は有名である。Zola は「居酒屋」の印税 18500 フランでパリ郊外に別荘をもつことを考えセーヌ河下流に家を探した。パリから東 40km の Médan に適当な家を見つけ 9000 フランでこれを購入した。2 階建のかなり大きな家であったが、友人の Flaubert には「ほんの兎小屋」だと告げた。Zola はこの「兎小屋」を次第に増築し、周囲を公園に整備したり温室を設けたりした。そのうちに池の真ん中に別館まで建てた。

Zola は毎年 5 月から 12 月末までをここで過ごし、彼の大作のほとんどはここで書かれた。次第に若い作家が集まるようになり、そのサロンは「メダンの夜会」(Soirée de Médan) と呼ばれた。家の増築、召使の管理それにサロンの主宰などは Zola 夫人がすべて取り仕切った。Cézanne も

Médan にきて Zola 夫人の肖像を描いた。集まる仲間には Guy de Maupassant (1850-93) などがいた。彼は Zola が編集した短編集「メダンの夜会」(1880) に「脂肪の塊」(Boule de suif) を発表して一躍、文壇に躍り出た。

Zola がこの同じ 1880 年に刊行した「ルーゴン・マッカール」叢書第 9 巻「ナナ」(Nana) は「居酒屋」に増して評判となったが、その内容がまたスキャンダルの種になった。この年にはこれ以外に「実験小説論」(Le roman expérimental) を書いた⁽⁸¹⁾。これは「Collège de France」生理学教授 Claude Bernard の「実験医学序説」(Introduction à l'étude de la médecine expérimentale, 1865) を踏まえて書いた Zola の自然主義小説論である。

Bernard は肝臓や膵臓の機能を研究して、肝臓からグリコーゲンを分離し、内分泌 (sécrétion interne) 機能を始めて発見した学者としても知られていた。彼の主張は従来の経験だけに頼る医学を、生理学の基礎の上に築きなおすにあった。実験科学の研究には事実の観察とその記述が不可欠である。Zola は実験科学における観察と記述とが、自然主義小説の創作過程と類似しているのを指摘したのである。

1885 年 5 月 22 日 Nadar のところへ Hugo 家から使いがきた。主人が死亡したから死顔の写真を撮ってくれという依頼である。Nadar は器材をもって駆けつけ、白い髭に包まれた Hugo の横顔を写真に撮った⁽⁸²⁾。Hugo は 83 歳である。2 年前にはまだ元気で日本から訪ねてきた板垣退助 (1837-1919) と会った。このとき板垣が約束した小説「九十三年」(Quatre-vingt-treize) はあとで「修羅の衢」と言う題で「自由新聞」に連載された⁽⁸³⁾。

次の年、1886 年 8 月 31 日は油脂化学者 M. E. Chevreul (1786-1889) の満 100 歳の誕生日である。Chevreul が「ゴブラン製作所」の所長だったときに書いた「色彩の同時対比の法則」(De la loi du contraste simultané de couleurs, 1839) は、あとでカラー写真の発想や George Seurat (1859-91) らの新印象派の点描法に影響をおよぼしたことで知られている⁽⁸⁴⁾。Chevreul 生誕 100 年祝賀会が「植物園」で開催され、これには大統領 S. Carnot (1837-94) が出席し、Chevreul の銅像の除幕式も催された。

パリの劇場は Chevreul のために特別興業を組み、夜には祝賀タイムツ行列まであった。ほとんど全パリ市民のお祭りだったのである。

この機会を Nadar が見逃がすはずがない。彼は自分と Chevreul の「インタビュー」を写真に撮り、これを新聞紙上に発表しようと計画した。これは8月の始めから実行に移して、Chevreul の住む「植物園」官舎で1回、自分の「スタジオ」で2回撮影した。

インタビューは自分がするから撮影は息子の Paul に委せた。このとき Chevreul はこう言ったそうである。

「私は97歳まで写真を敵視していたが、3年前から兜をぬいだよ。」
露出133分の1秒で100枚ほど連続で撮った。このような連続撮影ができたのは、ちょうどこのころ「イーストマン・ウォーカー」(Eastman-Walker) ロールスライド撮り枠が輸入されるようになり Paul がその代理人となっていたからである。

Nadar はアメリカからやってきたビジネスマン・タイプの George Eastman (1884-1932) とは気が合わなかったらしい。

写真の中から13枚を選び、その下に2人の会話をキャプションにした記事「100歳まで生きる方法」が「Journal Illustré」紙9月5日号にハーフトーン印刷で出た。この会話から Chevreul がその高齡にも関わらず、ウィットに富んだ明朗で魅力的な人物であったことが分かる。

あとでこの新聞は高値で賣れたそうである⁽⁸⁵⁾。

この年、Cézanne が Zola と絶交した。Zola が「ルーゴン・マッカール」叢書第14巻「制作」(L'Oeuvre) の中で才能がなくて苦悩する画家のモデルに、自分を使ったとして Cézanne が怒ったのである。Cézanne は自分が描いた「Zola 夫人像」を破り捨てた。

次の1887年は Nadar にとって受難の年であった。妻を伴ってイタリア旅行をして南フランスまで帰ったところで、パリ「Opéra Comique」劇場の大火事が新聞に報じられた。これを読んだ夫人が、ふだんからこの劇場に入り浸っている息子 Paul が、テッキリ死んだものと早合点して、卒中から半身不随になってしまった。Nadar は女出入りが多くて、必ずしも夫人に忠実とは言えなかったが、すぐに写真館を Paul に委せて自分たち夫婦はパリ南郊 Sénart に引き籠ることにした。ここでの住まいを彼は「隠

者のいおり」(L'Hermitage) と呼び、鶏や豚を飼ったり本を書いたりして暮らした。こんな生活は 1896 年まで約 8 年続く。ここには作家 Alphonse Daudet (1840-97) や、このころ「歌麿」「北斎」など江戸美術の紹介に忙しかった Goncourt が訪ねてくれた。

パリ Anjou 街「Nadar 写真館」の経営は Paul に委せた。ところが経営が思わしくない上に Paul のやり方が気に喰わないと言うので喧嘩になった。30年前の Adrien のときと同じである。Paul は自分の新しい経営方針に従って、カメラや写真器材の販売を始め、アメリカ「Eastman-Kodak」社の代理店を引き受け、おまけに写真雑誌「Paris-photographe」まで始めた。そのうえ Nadar が気にしたのは Paul の女性関係である。Paul は「Opéra Comique」座の女優 E. A. Degrandi との関係が噂されていた。彼女はイタリア生まれでおまけに夫があった。こんなことで 1894 年になって Nadar は写真館との縁を切ってしまった。

Paul にしろ弟の Adrien にしろ彼らには彼らの行き方がある。それを Nadar が理解しないから悲劇が発生するのである。

それに、このころ写真手法でも新しい方法が相継いで発表されるようになった。Nadar 自身も始めに習ったコロジオン湿板から新しいコロジオン乾板に切り替えていた (1861)。この方法では硝酸銀浴に浸けてヨウ化銀にしたコロジオン湿板を水で洗い、この上にタンニン水溶液を塗って乾かしてから使う。それほど感度は改善されなかったが、コロジオン湿板のようにその場で作るのではなく、予め作っておけるので便利であった。これが Paul などの時代になると臭化銀ゼラチン乾板へと進化する。1871 年にロンドン医師 R. L. Maddox (1816-1902) が臭化銀ゼラチン乳剤をガラス板に塗り乾かして使う方法を発表した⁽⁸⁶⁾。やがて、この素朴な方法に「透析」(1873)、「熟成」(1878)などの改良が加えられた。乾いていて保存が効くうえに「熟成」によって、著しく感度が上昇した。この改良法によるガラス乾板が 1880 年ころから広く市販されるようになった。この時期から臭化銀ゼラチン乾板が古いコロジオン湿板にとって変わった。

臭化銀ゼラチン乳剤をガラス板のかわりにセルロイド板に塗ると柔軟な「写真フィルム」となる。これは巻いてマガジンに入れカメラに装着できるから携帯に便利である。また連続撮影も可能となる。「写真フィルム」が

Eastman 社から売り出されたのが 1889 年である。これを Eastman が 1888 年に売り出した小型カメラ「Kodak」と組み合わせて爆発的に流行させた⁽⁸⁷⁾。こうして写真は大衆化時代を迎える。ヨーロッパでは大衆化が少し遅れたが事情は同じであった。

Nadar が田舎に引き込んだ 1887 年（明治 20 年）二葉亭四迷（1864-1909）の「浮雲」初編が世に出た。口語体で書かれた日本における近代小説の始めとされている。このころ日本の若い文学者たちは Hugo や Zola の小説などを英訳で読んで、どうすればこんな作品が日本語で書けるのかと、新しい文体を模索していた。

次の年、1888 年には 4 年間のドイツ留学を終えて軍医 森 林太郎（鷗外）（27 歳）（1862-1922）が帰国した。勉強家の彼のことだからドイツ留学中に評判の Zola の小説をドイツ語訳で読んだり、評論や「実験小説論」を紹介したドイツ文芸雑誌、新聞に眼を通していただろう。

1888 年には Zola の身边にも大異変が発生した。夫人が使っていた 21 歳のお針子 Jeanne Rozerot（1867-1914）と関係したのである。この夏 Zola は自分の小説の出版社 Charpentier ほか数人の友人とともに Bordeaux に近い Royan で過ごした。もちろん Zola 夫人も同行したが、夫人の気分が優れないと言うので、Zola との散歩には 5 月に雇ったばかりの Rozerot が代わりにお供をした。かねて自分の衰えを感じていた 48 歳の Zola が彼女の若さに惹かれたのである。パリに帰るとすぐに彼女を St. Lazare 街 66 番地のアパートに住ませた。次の年の 9 月には長女 Denise が、そして 2 年あとの 1891 年には長男の Jacques が生まれた。このころになって夫の浮気を知らされた Zola 夫人は Rozerot のアパートに乗り込んで Zola の手紙を残らず焼いてしまった。

Zola が写真の手ほどきを受けたのは Royan での暑中休暇のときだと言われている。一緒に休暇を過ごした Royan の新聞記者 V. Billaud から教わったと言うのである。Zola は Nadar を始めとしてパリでは Carjat など著名な写真家との交遊があったから、はじめから写真に興味を抱いていたに違いない。Zola は自分の異常に鋭い「写真的とも言える」視覚の記憶について次のように言っている⁽⁸⁸⁾。

「私の視覚的な記憶は異常に鮮明で、1 つの力と言えましょう。前に見た

物を思い出そうとするとき、私はその線、その形、その色、その臭い、その音まで全てそのままに見ることができます。それは究極的な再現そのものです。それらを照らしている太陽は眼が眩むばかりです。」

彼の臭気に対する感覚とその記憶も異常と言えるほどだったようである。Zola はこれらの鮮明な記憶を綴り合わせさえすれば小説になると思っていた節がある。この動機づけの上に彼の疑似科学的な「実験小説論」が構築されとも言える。「写真的」に正確な視覚記憶とその再生能力は志賀直哉（1883-1971）も持っていたようで、「正確なイメージが浮かばなかったら」文章にするなど弟子たちに戒めていたそうである。

Zola が本格的に写真を撮り始めるのは、子供たちが少し大きくなった1895年ごろからとなった。

鷗外の帰国や Zola の Royan 暑中休暇の次の年、1889年（明治22年）はパリ万国博覧会の年で、パリの空には「エッフェル塔」がすでにその姿を見せていた。この4月9日に Chevreul が死んだ。103歳に4ヵ月足りなかった。Chevreul の7歳のときコンコルド広場でルイ16世が処刑された。それで Chevreul は「フランス革命とエッフェル塔を見て死んだ」と噂された。

オランダの画家 Vincent van Gogh（1853-90）が死んだのが次の年1890年である。Gogh 自身は印象派展に出品したことはなかったが、友人の Paul Gauguin（1848-1903）は1879年第4回展に Pissarro の勧めで彫刻3点を出品していた。Gauguin は Gogh の弟の画商業 Theo（1857-91）をとおして Gogh と知合いになった。1888年の秋 Gogh が南仏 Arles から来いという手紙を書いてよこしたので、10月23日から「黄色い家」で一緒に暮らした。これはながく続かず、暮れも迫った12月23日にいきなり Gogh が Gauguin に切りかかり、その晩に自分の左耳を切り落としてしまった。このあと Gogh はパリに帰り次の1890年5月からパリ北郊 Oise 河畔 Auvers で療養したが7月27日に短銃で胸を打ち29日に死亡した。

兄思いの Theo も錯乱し次の1891年1月 Utrecht の病院で死亡する⁽⁸⁹⁾。

1891年には Zola が文芸協会会長に選ばれた。彼が最初に手掛けた事業は初代会長 Balzac の記念碑を完成させることであった。彫刻家 Auguste

Rodin は親友の Zola の頼みだと言うのですぐに引き受けてくれた。それも1年半で仕上げると言う約束であった。Rodin は Balzac の小説を読み彼の生まれ故郷まで足を運んで構想を練った。身体の特徴は仕立屋から聞いたが、写真嫌いの Balzac のことで写真が残っていないから顔の特徴が掴めない。

このとき Nadar の持っていた Balzac の銀板写真が役に立った⁽⁹⁰⁾。

「表情のところで私は Nadar が持っていた、ただ1枚のダゲレオタイプを使いました。これは Balzac の晩年の物で彼は病気で怖い顔をしています。手はまるで自分の死病の箇所を示すように胸の上におかれています。」

ただしこの銀板写真は Nadar が撮った物ではない。この写真は Balzac の死の5年ほどまえ1845年ころに撮られた物を、始め Nadar の友人石版画家 Paul Gavarni (1804-66) が手に入れ、これを写真家 Silvy に譲り、最後に石版画「Panthéon-Nadar」用の資料として Nadar が手に入っていたものである。左右逆転の銀板写真だから Balzac は左手を胸に当てているが、Rodin の作った270cmの像では右手を胸に当て、左手は部屋着の裾を押さえているようになおしてある。

石膏像が完成したのは約束の1年半どころか7年もあとの1898年になってからだが、この部屋着姿がダラシないと言うので評判が悪かった。それを怒った Rodin が「自分が作品の唯一の所有者となる」のだと言って自分の別邸に仕舞い込んでしまった。この像がブロンズに鑄造されてパリの街角に立つのは1939年になってからである⁽⁹¹⁾。

11. 鷗外—逍遙「没理想」論争—Zola と Nadar の晩年

Zola が文芸協会会長に選ばれた1891年4月には Gauguin がマルセイユ港からタヒチに向かって出発した。彼はこのあと一度パリに帰るが、1895年にまたタヒチに向い、1901年からは Marquises 群島に移った。ここで建てた小屋を彼は「逸楽の館」(Maison du Jour) と名付けたが、本人は逸楽どころか進行する梅毒を抱え、1903年5月8日この小屋で誰にも見守られずに死んだ⁽⁹²⁾。

Gauguin がタヒチへ向かった1891年は明治24年である。この年から

Zola「実験小説論」を引合いに出して森 鷗外と坪内逍遙との間に「没理想」論争が始まった。3年前の1888年（明治22年）に帰国した鷗外は、次の年3月赤松則良の長女 登志子と結婚し、10月には早くも文芸評論「しがらみ草紙」を発売した。そして次の年1890年1月には「舞姫」を「国民の友」に、5月に「うたかたの記」を「しがらみ草紙」に発表した。9月に長男 於菟が生まれたが登志子を離別して、10月に本郷駒込千駄木町の家にかわった。あとで夏目漱石が住む「我輩は猫」の家である。

次の年、1891年（明治24年）9月から「しがらみ草紙」に評論「山房論文」を掲載し始めた。坪内逍遙との論争が始まったのは「その一」からである。12月に掲載した「その七」は「早稲田文学の没理想」と題されている。これは「早稲田文学」11月号にある「マクベス評釈の緒言」を批判した物である。

「没理想」とはZolaが「実験小説論」で開陳した所説そのままに、自然主義小説ひいては小説全般の目指すべき目標は、実験科学の手法に従って事実その物を詳しく観察し、それを作者の作意、説明、構想（理想）を加えずに正確に記述するにあるとする主張である。

次の年、1892年（明治25年）1月鷗外は団子坂上の家に移った。あとで観潮楼と名付ける家である。1月25日発行「しがらみ草紙」第28号「山房論文その九」には次の論文が掲載された⁽⁹³⁾。

エミール・ゾラが没理想

付録

1. 医にして小説を論ず
2. 文学と自然
3. 再び自然を崇拜する人にいふ

論争はこの年の「山房論文その十三」まで続くが、逍遙が「人道常見」とか「小羊子」などの変名で茶化した反論を書き、韜晦を決め込んだのでウヤムヤに終わってしまった。

鷗外はミュンヘン大学でM. von Pettenkofer (1818-1901)、ベルリン大学ではR. Koch (1843-1910) について実験科学としての医学を学び、自分でも試験管を握って実験をした経験があるから、逍遙はもちろんZolaなどよりも実験科学の本質についての理解が深い。実験事実をそのままに観察し、それをそのまま記述すると言っても、そもそも実験をどう

計画し遂行するかのところで、実験者それぞれの作意が入ってくるし、記述し発表する段階でもその構想などに実験者の個性の色付けが加わる。

山房論文「エミール・ゾラが没理想」の中で鷗外は、写真と絵画を比較した Zola の所論について次のように言っている。

「然はあれど實際派なりとて、ただの光寫図（フォトグラフィイ）のようなる畫を作り、いたづらに事実を模倣するは悪し。畫工にはおのおの其特異なる眼あり、其特異なる性 tempérament ありて、これに適ひたる新しきものを製作するを其本分とす。要するに畫には個人的と実在的とあるべし。個人的なるものは人より来たり、実在的なるものは造化より来る。造化は常住にして平等なれども、人は不常住にして変化極なし。美術品は個人の性の地より観たる造化の一片なり。これをゾラの畫論とす。」

人間の手で描く絵画と、レンズが機械的に描く写真はこのように違うと Zola は言う。

ところが小説を論ずる段になると、Zola は一転して小説には事件そのままの記述が望ましいのだと、首尾一貫しない理論を展開する。

「さらにゾラは畫を論ずるに至りて忽ち光寫図に等しき畫を取らずといふ。若し新聞に出たる刑事の記録と、詩人の作りたる小説とを測るに、おなじ定規を以てすべくんば、光寫図の妙は繪畫の妙に同じからむ。ゾラは畫に於いては取捨の別を立てながら、文に於いては去就の分を明にせざりき。」

そして「医にして小説を論ず」の中で、鷗外は Zola と Daudet の優劣を論評する⁽⁹⁴⁾。

「小説を作るもの若し事実を得て満足せば、いづれの処にか天来の妙想を着けむ。事實は良材なり。されどこれを役することは、空想の力によりて倣し得べきのみ。ドオジェがゾラに優れるはここに得る所ありてならむ。」

Daudet はこのあと 5 年して 1897 年 12 月、57 歳で死亡する。

1893 年には「ルーゴン・マッカール」叢書第 20 卷「パスカル博士」(Le Docteur Pascal) が刊行され、ここに叢書の完成をみた。フランス政府はレジオン・ドヌール勲章を贈り、パリ Charpentier 邸では大統領を迎えて

祝賀会が催された。

この年 Zola は Rozerot を夏季に自分が暮らす Médan 邸の近くに住まわせるために、セーヌ河の河向こうの Cheverchemont に家をもたせた。次の年はもっと近くがよいと言うので、セーヌ河の同じ側で 5km ほどしか離れていない Verneuil に引っ越させた。あとで娘の Denise が回想するところによると、ここへは「雨でも風でも病気でも」毎日午後に自転車に乗った Zola がやってきた。これはパリでも同じで午前には Alexandrine 夫人と過ごし、午後からは Rozerot のアパートに向かうのを日課とした。

この頃から Zola は子供たちや Rozerot の写真を撮りまくっている。暗室を Médan 邸はもとよりパリのアパート、Rozerot に持たせた家にまで作って、現像、定着、焼付けなどすべて自分の手で行った。

もちろんゼラチン乾板が市販されている時代であるから、子供と自転車で遠出をして写真を撮るのも、コロジオン湿板時代とは較べ物にならないほど便利になっていた。

1894 年には夫人同伴で 10 月から年の暮れまでイタリア旅行に出かけた。イタリアでは父親の母国だと言うので歓迎された。ただローマ法王 Leo13 世には拝謁を許されなかった。この年出版の著書「ルルド」(Lourdes) がカトリック教会禁書に指定されていたからである。Zola の旅行中の 11 月 1 日にユダヤ系の A. Dreyfus 砲兵大尉 (1859-1935) がドイツへ軍事機密を売ったという罪で逮捕された。あとで第 3 共和制最大の危機とまで言われた大疑獄事件にまで発展する「ドレフェス事件」の発端である。

しかし Zola はこの時期まだ事件には無関心であった。

1894 年は明治 27 年である。この年、樋口一葉 (1872-96) が「文学界」に「たけくらべ」を連載し始めた。この小説は鷗外の「舞姫」とおなじく流麗な文語体で書かれていた。この間にも日清戦争が 8 月から翌年の 4 月まであり、鷗外も軍医として朝鮮、大連、旅順口と転戦した。凱旋した次の年、明治 29 年 1 月から「しがらみ草紙」に代えて「めさまし草」が創刊され、この中で鷗外は露伴らとともに「たけくらべ」を激賞した。

一葉が死亡するのがこの年の 11 月 23 日である。

息子 Paul の写真館と縁を切った Nadar は、77 歳になった 1897 年から Marie Gilard からの経済的援助のもとに、マルセイユ「Noailles」街 21

番地に新しい写真館を始めることにした。ここでは Paul の商売に倣ってカメラや写真器材を売り、写真撮影の個人指導までした。このために Nadar の財政はかなりの回復をみた。

Zola の方はそろそろ自分の自然主義文学の将来と自分の体力の限界を感じ始めていた。そこへ 1896 年からドレフュス事件にでっち上げの疑いが生まれて、疑獄事件に発展しそうな気配が見えてきた。Zola は次の年から新聞「フィガロ」紙に Dreyfus 援護の論陣を張り始め、1898 年 1 月 13 日になって Clemenseau の主宰する新聞「あけぼの」(L'Aurore) に大統領への公開状「私は告発する」(J'accuse!) を発表した⁽⁹⁵⁾。陸軍大臣が Zola を告訴して、2 月 23 日セーヌ重罪裁判所で懲役 1 年、罰金 3000 フランの判決が出て、7 月にはヴェルサイユ地方裁判所で刑が確定した。Clemenseau が亡命を奨めたので 7 月 18 日パリ北駅から Calais に向い、7 月 20 日にロンドンに着いた。イギリス亡命は次の年、1899 年 6 月 3 日に Dreyfus が釈放になり、Zola が 6 月 5 日にパリに帰るまでの 11 ヶ月であった。この間にも Alexandrine 夫人がロンドンを訪れ、夫人が帰ると入れ替わりに Rozerot が 2 人の子供を連れて滞在した。Zola は亡命先のイギリスの風景に興味を持ってここでも写真を撮るのを忘れなかった。

1900 年はパリ万国博覧会の年である。場内には電気機関車が走り「動く歩道」まで設けられた。電気時代がやってきている。「電気館」の屋根には 4000 個の電球が取り付けられ、ここだけは不夜城の観を呈した。博覧会では Nadar のために特別のセクションが設けられ、彼の撮影した多くの写真作品の展示のほかに、気球「Géant」号の飛行、「空気より重い機械による飛行」研究など彼の多くの業績が展示された。

60 歳になった Zola は 11 歳の娘 Denise と 9 歳の息子 Jacques を、展覧会に何度も連れて行き会場の風景を撮って飽くことがなかった。ただ不思議なことに展示会場の内部を写したものがなく、建物の外部とかセーヌ河を前景にした会場風景の作品が多い。このころ彼はカメラを 10 種類ほどもち、外出には携帯に便利なケース入り Carpentier ステレオカメラを愛用した。撮影アングルにも凝って、エッフェル塔の上から撮った会場風景などには優れた物が多い⁽⁹⁶⁾。またイルミネーション電灯で飾られたエッフェル塔など珍しい夜の風景写真もある。Zola はパリの市街や公園も多

く撮っている。これらに雨の日、雪の風景など、ふつうの写真家が撮りそうもない題材が多いのも、彼の風景写真の特徴に数えられるだろう。

Médan 邸で友人の肖像写真を撮るときには、スタジオ用の台付大型カメラや背景まで用意した。Zola は器用な男でシャッターに工夫して、遠くからでもシャッターが切れるようにしている。彼が Rozerot を抱擁している写真などにはこの装置を使ったのであろう。

Rozerot の肉体には執心があつたらしく、髪をジプシー風に垂らした上半身のヌード写真までである⁽⁹⁷⁾。

Zola の写真集は息子 Jacques の子供、すなわち Zola の孫にあたる François-Émile-Zola 博士が「写真家ゾラ」(Zola, photographe, 1979) を出して世に知られるようになった⁽⁹⁾。

このパリ万国博覧会の年に Nadar「私が写真家のころ」が出版された。友人の Daudet は 1896 年に死亡していたから、息子の Léon Daudet (1867-1942) が代わって「まえがき」を書いてくれた。

ここで彼は次のように言う⁽⁹⁸⁾。

「生活を楽しむのは、詩人に対して付与された贈物で、しかも最高の物である。これを Nadar は誰よりも多く恵まれていた。」(Aimer la vie, c'est le don des poètes, le don suprême, et Nadar l'eut comme personne)

Zola が死亡するのはパリ万国博覧会の 2 年あと 1902 年 9 月 29 日である。暖炉の煙突が詰まっていたためのガス中毒だとされたが、ドレフュス事件での活躍を憎む右翼の仕業だと言う噂がたった。Dreyfus の無罪が確定したのが 1906 年になってからであるから Zola はこれを知らずに死んだことになる。絶縁していた Cézanne もかつての親友の死を聞いて号泣したと伝えられている。その Cézanne も 4 年あとの 1906 年 10 月 22 日に故郷の南フランスで死亡する。

おわりに

Zola の死の 1902 年は明治 35 年である。彼の死が報じられて 4 日もしない明治 35 年 10 月 3 日東京「萬朝報」(ヨロズチョウホウ) に幸徳秋水「ゾーラを哭す」がトップ記事として掲載された。ここでは Zola が「非命

にして逝く」となっている。秋水のことだからこの記事では Zola の文学的業績より、下層階級の悲惨を描き、無辜の罪に泣く Dreyfus を弁護した人道主義者としての Zola の側面を強調している。

「彼は亦全くトルストイと異なり。然り彼はニイチェの本能主義に非ず、トルストイの耶蘇教的愛他主義に非ず、実に社会の組織、人類の生活を以って、其基礎を科学の上に置かんとする者なりき。彼は実に純乎たる社会主義者なりし也。」

Nadar の方はこのころ彼の最後の著書「親友ボードレール」の執筆に忙しかった。パリ万国博覧会場でパリがまだ自分を忘れていないと知った Nadar は、1904 年になって夫人をつれてパリに帰ることにした。しかし、その夫人も 5 年後に死んでしまった。

この年、1909 年 7 月 25 日にはフランス人飛行家 Louis Bleriot (1872-1930) がドーバー海峡の横断飛行に成功した。Wright 兄弟が 1903 年に「空気より重い」飛行機を始めて飛ばしてから僅か 6 年目である。「空気より重い機械による飛行」の初期推進者の 1 人であった Nadar はその進歩の速さに感動して電報を打った⁽⁹⁹⁾。

「89 歳の生涯が地下に消えるまえに、空気より重い機械による飛行の先覚者のこの胸を、あなたの勝利が喜びで満たして下さいました。厚く感謝いたします。」

この Nadar も次の年、1910 年 3 月 15 日に 90 歳に 2 週間届かない生涯を終えた。彼が半世紀まえに描いた石版画「Panthéon-Nadar」の似顔絵の主人公たちの中で、残っている人はもう誰もいなかった。

かつての友人 Philipon が彼のことをこう書いていた⁽¹⁰⁰⁾。

「Nadar は今でも、われわれの若いころの愛すべきボヘミアンであるし、またあり続けるであろう。ウィットはあるのだが合理性はかけらもなく、なんにでも夢中になり、なんでもしようと思って、なんにでも手を着ける。そして、いつでも興味をなくして止めてしまう。彼の生活はこのように支離滅裂であったし、いまもそうで、これからもそうであろう。彼は息子によい評判と一と財産を残せたはずなのに、今のところ残すものと言えば、これだけはしてはいけないと言う戒めだけである。」

Nadar は爵位や勲章の全てを断わり、最後まで「白髪の小学生」のまま

あった。彼の生涯は1820年に始まり1910年に終わるから、「驚異の世紀」19世紀を丸まる生きたことになる。「驚異の世紀」(The Wonderful Century)はDarwinと進化論の優先権を争ったA. Wallace (1823-1913)の著書(1898)の名前である。

「驚異の世紀」は自然科学の基礎の上に築かれた産業革命の結実期にあたる。産業革命でヨーロッパは「動力」を獲得した。この熱機関からの「動力」に加えていま、電磁気学に基礎をおく「電力」が加わった。こうして人びとは科学知識に「動力」「電力」を組み合わせて、可能にならない物はないと夢みることができた。これが「驚異の世紀」の情緒的背景である。

その象徴が1889年パリ万国博覧会のエッフェル塔であり、1900年博覧会の電気館と言えるだろう。

そして「驚異の世紀」の基礎となった実験科学万能への信仰が、Zolaをして「実験小説論」を書かせたと見ることもできる。

この「写真史シリーズ」論考を書くにあたって、いつものように大阪帝国大学理学部化学科 小竹研究室の先輩 大庭成一博士、富士写真フイルム株式会社 富士宮研究所 安達慶一、武田薬品工業株式会社 創薬第3研究所 青野哲也の諸氏に大変お世話になった。また文献の収集では、大阪大学附属図書館 参考係 今井義雄、永田敏恭、東田葉子、中京大学附属図書館 参考係 清水守男、田中良明の諸氏から多大の援助を賜った。この機会にこれらの皆様に厚く感謝の意を表する次第である。

付録1. 紙写真に使用する手法について

Procédés employés pour obtenir les épreuves
de photographie sur papier.

Blanquart-Evrard, *Compt.rend.*, 24, 117 (1847)

Daguerre 氏の見事な発明に感嘆すると同時に次のような希望が生まれた。とくに芸術家たちは科学者に Daguerre 氏が銀板の表面に固定したカメラの映像を紙の上に固定する方法を探るように頼んだ。この要求は聞き入れられて、多くの学者が各種の化合物の写真的性質を研究した結果、無数の手法がうまれた。しかし、これらはなぜ結果をもたらさないのか。これをアマチュアの不熱心のせいにはできない。それは新奇なものが常に掻き立てる刺激以外に、この新しい写真の分野は芸術と工業への2

重の関係から大きな興味をそそっているからである。多くの試みが不成功に終わっているのは、現行の手法の根本に失敗の深い原因がある。すなわちこの感光紙を作るときの原理を知らないからである。

現在まで私の研究はこの目的に向けられていた。そして私はすぐに今まで得られていた結果がいかに不確実で欠陥の多いものであるかに気が付いた。画像は力強くないし繊細でもない。光の諧調は欠如して白黒の透明さが無い。これらの原因は不完全で表面だけの感光膜にある。事実、銀板の感光膜の真似をして、紙の1面だけに感光剤 (les principes photogéniques) を沈澱させて済ませている。この手法では紙の表面の不均等さのために、カメラの中で露光すると光の不均等な画像を与えることになる。露光に続く化学反応はこの不均等さを目立たせる。さらにまた感光膜は表面だけであるから、ハイライト部は色が淡く、ハーフトーン部は透明さに欠ける。このような考察の結果、私は1つの原理に到達した。それは溶液反応の原理に従って、紙の生地全体を吸収によって感光化しなければならないことである。また最後の写真画像を与える化学反応も同じ状況で行わねばならない。原理が決まったのであるから、作業する人はこの範囲で自分の好きなように化合物を選べばよろしい。これは銀板のときと同じである。ある人は塩化物より臭化物を好むであろう。紙のときも同じで、好きなように選択すればよいのである。結果はいろいろであろうが、操作のあいだこの原理だけは守らねばならない。

紙写真を始めようとする人びとの苦勞を軽減する目的で、それを使えば初めての人を勇気づけるような良い結果を与える、現在 私が採用している画像の作り方を次に説明しよう。感度を良くするには湿った感光紙を使わねばならない。しかし、このとき操作を大いに厄介にする状況が発生する。紙は撮り枠の中に入れるとすぐに膨張する。この重大な厄介を避けるには湿ったスレートを使えばよいという人もある。しかし、これは厄介の発生を数分間だけ遅らせるに過ぎない。また結果として写真を撮ると同じ場所で最初の操作ができなくなる。解決法の研究中、私はガラス板を試みた。この上に感光紙をおき、これを板で囲んで撮り枠にした。ある日、うっかりしてこのガラス板を撮り枠に反対に入れてしまった。紙が内側でガラス板がカメラの対物レンズを向くようにである。しかし画像は同じよ

うに得られた。これでアイデアがひらめいた。映像はガラスを通り抜けるのである。感光紙の1面をを予めよく湿らせた2, 3枚の紙で覆い, 2枚のガラス板に挟んで撮り枠に入れた。こうして私はかなり長く湿気を保つことができた。しかも感光紙はガラス板に密着しているから常に完全な平面が保てる。こうして私は遠くに出かけて写真を撮り, 帰ってきて暗室で処理ができるようになったのである。

このように私は紙写真の難関の1つを克服し, その操作を銀板と同じように簡便にできた。私がこれから説明しようとする操作は全て冷所で行う。それはこれが望ましいからではなく, この方が守りやすいし, 金のない写真家でもできる範囲であるからである。この人にはアパートの片隅で外部からの光を完全に遮断したところなら実験室として使える。ここはロウソクかふつうのランプの光で照明してもよい。

操作は2部に分かれる。最初のはカメラの画像用すなわちネガで, これは明るいところが黒く, 暗いところが明るく表現される。このネガのためには丈夫で, 全体ができるだけよい生地の, 上質の艶ある便箋紙を選ばねばならない。私は Marion 社 10号 B を愛用している。硝酸銀1部 (注: 硝酸銀の試薬は全て完全に遮光したフラスコの中に保存すべきである) 蒸留水30部 (すべて重量で) の溶液を平皿にいれ, この表面に上記の紙を載せる。このとき液体と紙のあいだに空気泡が生じないように注意する (この注意は以下の全ての操作についても同じ)。1分間皿においてから, 紙を引き上げ, 隅を挟んで水を切り, ニス塗の家具やロウ紙のような防水の表面の上に平において, ゆっくり乾燥させる。部分的に液体が残るのは避けなければならない。さもないと画像の染みの原因となる。

別の皿の中にヨウ化カリウム25部, 臭化カリウム1部, 蒸留水560部の溶液を入れて, 上記の紙を硝酸銀の面を上にしてこの中に1分半か2分 (寒いとき) 浸ける。2隅を持って皿から取り出し, ピンとしたままで多量の蒸留水を入れた大皿の中に入れる。最後にこれを洗い, 表面に沈着しているかも知れない結晶性沈澱物を完全に取り除く。次に水平に張った紐に紙の1隅を吊し, 水切りをしてから完全に乾燥させる。このようにして作った感光紙はあまり詰め込まずに, 光を遮断したボール紙箱に入れて保存すれば, 数ヶ月は保存が効く。この方法で数ヶ月の旅行に必要な感光紙

が1日で作れる。残った溶液は黒紙で覆ったフラスコに保存しておく、なくなるまで使える。

写真を撮るときは平らなガラス板をこれより大きな板の上に固定し、この上に硝酸銀6部、水酢酸11部、蒸留水64部の溶液（硝酸銀を溶かすのに水の半分だけを使って、この上に酢酸を加え、1時間ほどおいてから残りの水を加える）（注：この溶液はガラス栓つきフラスコに保存できる。しばらくして表面に沈澱ができたなら、作業のたびに目の細かい布で濾すか、ほかの方法で除かねばならない）の数滴を注ぐ。このガラス板の上に、最初の操作で硝酸銀を吸収させた面を向けて感光紙を載せ、手で紙をよく伸ばして溶液を全面によく浸ませ、ガラス板に密着させ、空気泡を取り込ませないようにする。これが済むと、この上に予め蒸留水に浸けておいた数枚の上質紙を載せる（非常に厚ければ1枚でもよい）。この湿らせた紙の上に同じ大きさの2番目のガラス板を載せ、よく押し付けて1枚の板のようにする。この全体を準備したカメラの撮り枠の中に入れて銀板写真の撮り枠と同じように露光させる。この感光紙は銀板写真程度の長さの露光を必要とする。ヨウ素-塩素法で作った銀板の4分の1ほどである。これは温度にも左右されるだろう。これは光の強度に劣らぬほどの大きな促進効果があるから注意しなければならない。

露光が終わったら感光紙をガラスまたは磁器の板の上に載せる。この板は感光紙が密着しやすいように予め少し湿らせておく。この上に没食子酸の飽和溶液を注ぐと、たちまち画像が現れる。没食子酸の反応は紙の中の反応がよく進行し、ハーフトーン部に全てのデテールが現れるまで続けるが、ポジで黒部になるはずの白色部が変色し始めるまえに反応を中止すべきである。そのためには、この上に水を注いで感光紙を洗い没食子酸を除く。それから感光紙を板の上に置きなおして、この上に臭化カリウム1部と蒸留水40部の溶液を注いで膜を作る。あと15分間この膜で覆われるようしておいてから、多量の水で感光紙を洗浄し、数枚の吸取紙の間で乾燥させる。これが済むとかなりの枚数のネガが溜るが、この前にもっと透明にするために蜜ロウ（ワックス）を施してもよい。ネガの上にワックスの削り片を少し載せ、この上に数枚の便箋紙を載せて、アイロンで押さえてワックスを融かし込む。これを繰り返すとネガの余分のワックスがかな

り取り除かれる。

ポジ用紙の作り方 この目的には最上級の紙で、かなり厚く良く艶出した紙を選ばなければならない。飽和食塩水 3 部と蒸留水 10 部の溶液を平皿にいれ、この上に 1 枚の紙を載せて完全に平たくなるまで (2-3 分間) 放置する。あと、これを吸取紙に載せ紙の裏を同じ方向に手で何度も強く擦って乾燥させる。吸取紙はこの食塩紙からほとんどの湿気がなくなるまで取り替える。紙は硝酸銀 1 部、蒸留水 5 部の溶液を入れた皿に移し、1 番目の紙のあとに食塩水に入れた 2 番目の紙が上記のように乾燥するまで、この皿の中に放置する。ついで硝酸銀溶液から取り出し、隅を持って水を切りネガ用紙を作ったときのように防水性の平面の上におく。紙を食塩水浴から硝酸銀浴に移すのには 1 分もかからないから、写真家は数時間の間にかなりの数のポジ用紙を作れるのが分かるであろう。

完全に乾燥したら、木箱かボール紙箱にあまり詰め込まずに入れて保存する。1 週間も 2 週間も前から作っておくのは良くない。それはこの間に変色し、いかに画像が良く出ても白のところ、新しく作られたときの輝きを持つことはないからである。

陽画に焼付けるには、ネガ紙写真の画像面をポジ用紙の感光面の上におき、この合わせた物を 2 枚のガラス板の間に挟んで黒布で覆われた枠 (2 重板底) の中に入れて押し付ける。上のガラス板は丈夫で重くて、その重さでネガ紙を完全にポジ用紙に密着させるようであるべきである。これが済むと、できたら太陽光のような強烈な光線で焼付ける。光線はガラス面に直交するように当てる。良いポジを得るのには、露光を十分に長くする必要はある。しかし画像の鮮やかな明部が変色するまでに露光は止めるべきである。露光の大体の時間を知るのには 1 回の経験で十分であろう。ネガの鮮明さにもよるが太陽光で平均して 20 分であろう。露光が済むとポジ用紙を暗室にもどし、まずこれを 15 分間雨水の皿に浸して、つぎにハイポ (hyposulfite de soude) 1 部、蒸留水 8 部の溶液の皿に入れる。この瞬間からポジは明るいところで観察でき、ハイポの作用を追跡できる。見ているとポジの白部は次第に明るくなり、ハーフトーン部が出現してくる。画像の色調は始めの汚い色から全体が赤褐色となり、美しい褐色から次第に黒褐色に最後にはアクアチント版画の黒色に変わる。写真家は自分

の満足する色合いのところで中止すると良い。これで定着は完全なのだが、長く反応させたハイポを完全に除くために多量の水で洗う。そのあと水を入れた大皿の中に1日か少なくとも5-6時間は放置する。最後に数枚の吸取紙の間に挟んで乾燥するとよい。ハイポ浴のときと同じでこの水槽には、同時に好きなだけのポジを入れても差し支えない。2時間経ってもハイポの作用を受けないポジは捨てるべきである。これは、このポジが十分に露光されなかったか、十分に定着されなかった証拠になる。

以上に説明してきた操作は複雑に見えても、実験してみると大変にやさしいことが分かるであろう。そしてこれを銀板写真の操作と比較してみれば、その簡便さに驚くに違いない。

ネガ用感光紙を予め作っておけると言う利点は、写真を撮るのに大変に有利であろう。それは、いつも大いに厄介な荷物を軽減してくれ、予めしておくことのできない銀板の研磨に要する時間と労力の節約になるからである。また旅行から帰ってポジを作り、それも無限に増やせると言う能力は、写真術の発展に少なからず貢献するであろう。さらに、その結果は銀板と違って細工ができないわけではなく、反対に好きなように修正できることも写真家の共感を得るであろう。

操作のしやすさ、操作の確実さ、プリントが多くできること、この3つの要素が将来において、この新しい写真の分野を工業的にも重要な地位に進めるに違いない。それは長旅の生き生きした思い出や、愛する者の忠実な面影を人びとに与えるであろうし、学者には機械、解剖、博物学上の正確な映像を提供するであろう。また歴史家、考古学者、芸術家には美しい風景、古代および中世の優れた芸術品の全体や部分像を提供するであろう。これらの作品は数が少ないだけでなく、断片でしかない物も多いのである。

付録2. カメラの映像を乾いた紙の上に作る紙写真

Photographie sur papier. Moyen d'obtenir l'image
à la chambre noire sur papier sec.

Blanquart-Evrard, *Compt.rend.*, 30, 663 (1850)

写真術に習熟した人をして、これをさらに有利な工業にまで発展させようと決心させるのには、化学操作に経験のない人のために紙写真の操作を

簡便で、確実かつ平易にすることが必要である。この新しい目的のための第1条件は露出の場所で要求される煩わしい操作からの開放である。

次にその方針を示す。

1. 湿った紙の代わりに乾燥した紙を使い、露出の場所でしなければならない難しい操作から写真家を開放してくれる操作法であること。
2. この紙写真の簡便な製品が工業的に製品化でき、自分でこれを作る手間をかけたくないアマチュアにこれが提供できること。いままで発表された方法で作った感光紙は乾燥状態にすると、このあと没食子酸との反応で写真画像が完全に消されたノッペラな色だけを与える。漿液 (sérum) はこの不都合さを消す性質を持っているので、次のようにして感光紙を作ることができた。

攪拌しておいた乳を濾して乳漿 (partie claire du lait) を集め、この半リットルの中に卵白1個をかき混ぜて入れる。つぎに全体を固まらせるために沸騰してからさらに濾過する。冷却してから、この100部(重量)に対して5部のヨウ化カリウムをこの中に溶かす。感光紙用の紙はとくに厚いものを選び、これを上の溶液の中に2分間完全に浸してから、2隅をピンで挟んで水平に張られた紐に吊して乾燥する。これまでの操作は別に特別の注意を払うことなく昼光のもとで行ってもよい。この紙はおそらく6ヵ月かずっと前に作った物と同じように使える。古いものを使うときは、なるべく露出に近いときにロウソクの火のもとで、もう一度上の操作をするとよい。また、できるだけ高温を避けておくと、ずっと後までよい結果を与える。

あとの操作は1847年1月の報告に述べておいたと同じ処方で行う。硝酸銀1部、氷酢酸2部、蒸留水10部からなる酢酸-硝酸銀液 (acétonitrate d'argent) をガラス板に注ぎ、この上に紙の一方の面を載せて紙が完全に透明になるまで浸す。紙を持ち上げロウソクの火でこれを確かめてから、白い吸取紙 (印刷紙でもよい) 数枚の間で乾燥させ、この感光紙は撮り枠に入れるまで、挟んだままにしておく。撮り枠ではすでに湿式法のときに説明しておいたように、丈夫で乾いた1枚の紙の上に載せて2枚のガラス板の間に挟む。

露出は光の強さや対象物の明るさにもよるが大変に長く、短くても5分

ほどである。撮り枠から取り出して紙の露光した面を飽和没食子酸水溶液の膜の上に載せる。このとき水溶液が背後にまで浸みているのを確かめる。画像は少しずつ現れ、希望する濃さになったところで止める。あと多量の水で洗い、還元されなかった銀塩を溶かし去るために臭化カリウム1部、水20部の水溶液の中に入れる。このあと画像を破壊し続けるおそれのある臭化カリウムを完全に除くためにさらに水洗し、最後に何枚もの吸取紙の間で乾燥する。

アルブミン (卵白) 乾燥紙 (中崎注: 陰画用) の作り方 アルブミン紙は上の漿液紙と性質が似ているが少し性質が劣る。アルブミン紙は漿液紙と同じようにヨウ化カリウム紙にした段階では長く保存できるが、酢酸-硝酸銀液処理をしてからは次の日までしかおけない。これから説明するこの感光紙から作った陽画プリントは、ガラス板からの物には劣るが美しく、白黒の諧調がそれほど極端でなく、調和がとれて柔らかで大変に魅力がある。このため、この方法は写真の中に芸術性を追求しようとする人びとに対しては、価値ある成果であると信ずる。

卵白1個につきヨウ化カリウム飽和水溶液30滴、臭化カリウム飽和水溶液2滴を加えてこれを攪拌して泡立たせる。液状のアルブミンになるまで放置してから、これを清潔な絹布かモスリン布で濾して大きな平皿に集める。この液層に原料の紙を入れて数分間放置する。こうしてアルブミン液が浸みたら、紙を1隅でつまんで引き上げ、水を切ってから横に張った紐に1つまたは2つのピンで吊して乾燥する。

このあとの酢酸-硝酸銀液処理は、すでに漿液感光紙のところでも述べたと全く同じである。あと2枚の吸取紙の間で完全に透明になるまで乾燥する。露出のために撮り枠にいれたり、そのあとの没食子酸による現像その他はすでに述べたと同じようにする。しかし露出時間は少し長く一般に4分から5分ほどである。

アルブミン (卵白) 印画紙の作り方 アルブミン印画紙からのプリントは少し光沢に欠けるが、諧調は豊かでキメが細かく、透き通っていてずっと好ましい。これは次のようにして作る。卵白25部(重量)に塩化ナトリウム(純白の食塩)の飽和水溶液100部を加え、これを泡立ててから上記のように濾過する。紙は30秒ほどこのアルブミン液のなかに放置する。

次に引き上げ6分から8分間乾燥する。ついで硝酸銀25部と蒸留水100部とを入れた皿にこれを沈める。少なくとも6分間この中においてから、1847年1月の報告で説明した方法で平たく乾燥する。

付録3. ネガ用写真感光紙の新しい作り方について

Note sur un nouveau mode de préparation du papier
photographique négatif,

Gustave Legray, *Compt. rend.*, **33**, 643 (1851)

紙写真を行っている人はだれも、化学的に平均した、性能のよい感光紙を作る難しさを痛感している。私は多くの試みのあとでやっと、これらの不便さをほとんど完全に克服した、ある種の上塗りを紙に施すのに成功している。

この新しい紙は操作の確実さと、その簡便さで非常に優れているので、広く利用されるのは疑いを入れない。この上塗りに使うのは純蜜ロウ(ワックス)である。このワックスを大きな平皿のなかで100°Cに加熱して融かしておく。紙をこの中に完全に浸す。これを引き上げて、数枚の2つ折り吸取紙の間に挟んで、この上からかなり熱くしたアイロンで押さえる。これで余分のワックスが吸取紙に移る。上手に作ったワックス紙は表面のどこもテラテラすることなく、完全に透明でなければならない。

このワックス紙を次の熱水溶液の中に浸す。

| | |
|----------------------|-------|
| 重湯 (おもゆ, eau de riz) | 1000g |
| 乳糖 (sucre de lait) | 40 |
| ヨウ化カリウム | 15 |
| シアン化カリウム | 0.80 |
| フッ化カリウム | 0.50 |

半時間ほどしてからワックス紙を引き上げ、隅を挟んで吊して乾燥させる。このあとワックス紙は次の酢酸-硝酸銀 (acétonitrate d'argent) 透明水溶液の中に浸す。

| | |
|-------------------|------|
| 蒸留水 | 300g |
| 硝酸銀 | 20 |
| 氷酢酸 | 24 |
| 活性炭 (noir animal) | 5 |

この活性炭は感度をよくし、使用後の溶液を脱色するのに役立つ。

ワックス紙をこの溶液の中に3分間ほど浸すが、溶液とよく接触させるために、紙の両面を刷毛で擦るとよい。最後にワックス紙は繰り返し蒸留水で洗浄し、吸取紙の間でよく乾かす。

以上の2操作のあとワックス紙はすぐにカメラに入れてもよいが、暗いところに保存すれば14日以上でも変質しないで保存できる。このようにして、このワックス紙にはこれまでの感光紙の全てに優れた利点がある。カメラの中で露光してから、すぐに没食子酸で現像しなくてもよい。その晩または翌日、さらに翌翌日まで延ばしても不都合はない。こうして、この新法がいかに旅行のときの操作に便利であるかが、分かってもらえるであろう。没食子酸溶液は没食子酸1g、硝酸銀0.5g、蒸留水200gからなる。定着は次亜硫酸ナトリウム（中崎注：ハイポ）でふつうのように行う。

この方法で作った数枚のプリント（une série d'épreuves）を科学学士院に提示する。作業は全く簡単であるから、「歴史的モニュメント保存委員会」のための仕事では、いつも1日に25枚から30枚の処理ができた。

いまここに科学学士院に提示した手法は、すでに1851年2月25日に学士院に封印して寄託したもので、私の優先権が確保できたあとで封印を開封するように依頼してあった。私はまた1851年11月17日に寄託した封印包も開けるように頼んだ。これは陽画プリントの色調を整える方法に関するものである。

文 献 と 注

- (1) 中崎昌雄「コロジオン湿板時代の2人の写真家—ルイス・キャロルとキャメロン夫人」中京大学「教養論叢」第36巻、第3号（通巻112号）61（1995）
- (2) N. Gosling, *Nadar*（以下に「ナダール」と略す）Secker & Warburg, London, 1976.
- (3) François-Émile-Zola & Massin ed., *Zola-photographer*（以下に「写真家ゾラ」と略す）Henry Holt & Co., New York, 1988.
- (4) 辻昶「ヴィクトル・ユゴーの生涯」（以下に「ユゴーの生涯」と略す）潮出版社、1979年4月、p. 73.
- (5) 「Daumier」（日本語版）美術出版社、1969年5月.
- (6) 中崎昌雄『『ダゲレオタイプとジオラマ』—手法の歴史とその実際—『ダゲレオタイプ教本』解説と翻訳（上）』中京大学「教養論叢」第32巻、第2号（通巻

- 95号) 439 (1991); 中崎昌雄「『ダゲレオタイプとジオラマ』—手法の歴史とその実際—『ダゲレオタイプ教本』解説と翻訳 (下)」中京大学「教養論叢」第32巻, 第3号 (通巻96号) 783 (1991)
- (7) 中崎昌雄「不当にもダゲレオタイプと名付けられた発明の歴史—ダゲール剽窃弾劾パンフレット」中京大学「教養論叢」第32巻, 第1号 (通巻94号) 1 (1991)
- (8) Nadar (Gaspard Félix Tournachon), *Quand j'étais photographe* (以下に「ナダール—写真家のころ」と略す) E. Flammarion, Paris, 1899 (Arno Press Reprint, 1979)
- (9) 中崎昌雄「Talbot『写真印刷』発明と晩年の研究—動力, アッシリア学, 植物学, 数学, 天文学」中京大学「教養論叢」第31巻, 第4号 (通巻93号) (以下に中崎「写真印刷」と略す) 1551 (1991)
- (10) 中崎昌雄「世界最初の『写真』画集—Talbot『The Pencil of Nature』」中京大学「教養論叢」第28巻, 第3号 (通巻80号) 673 (1987)
- (11) 中崎昌雄「写真発達史における1839年という年—W. H. Talbotの場合」中京大学「教養論叢」第29巻, 第2号 (通巻83号) (以下に中崎「1839年」と略す) 312 (1988)
- (12) 中崎昌雄「だれが初めて『ハイポ』(チオ硫酸ナトリウム)による写真『定着』を発見したのか?—J. B. Reade 対 John Herschel」中京大学「教養論叢」第30巻, 第3号 (通巻88号) 663 (1989)
- (13) 中崎昌雄「1839年3月14日 Herschel『写真研究』発表—Talbotとの交渉をめぐって」中京大学「教養論叢」第30巻, 第4号 (通巻89号) 1179 (1990)
- (14) 中崎昌雄「Talbot『カロタイプ』写真術発明をめぐって—写真『潜像』とその『現像』の発見」中京大学「教養論叢」第29巻, 第3号 (通巻84号) (以下に中崎「カロタイプ」と略す) 587 (1988)
- (15) 中崎昌雄「初期写真レンズの開拓者たち」中京大学「教養論叢」第35巻, 第2号 (通巻107号) 518 (1994)
- (16) Helmut & Alison Gernsheim, *The History of Photography* (以下にGernsheim「History」と略す) Thames & Hudson, London, 1969, p. 290.
- (17) 中崎昌雄「Talbot 写真裁判と化学者たち—A. W. Hofmann ロンドン時代」中京大学「教養論叢」第31巻, 第2号 (通巻91号) (以下に中崎「写真裁判」と略す) 499 (1990)
- (18) 「ナダール」p. 2.
- (18) 中崎「1839年」p. 289; 中崎昌雄「現存する『世界最古』の肖像写真—J. W. Draperとその光化学研究」中京大学「教養論叢」第30巻, 第1号 (通巻86号) 55 (1989)
- (20) 「ナダール—写真家のころ」pp. 1-8.
- (21) Gernsheim「History」p. 306.

- (22) 畑一夫編集, 中崎昌雄著「有機立体化学」(日本化学会編「化学の原典」第11巻) 東京大学出版会, 昭和50年4月, p. 179.
- (23) 「ナダール」 p. 4.
- (24) 「ユゴーの生涯」 p. 128.
- (25) 「ナダール」 図版 pp. 6-7.
- (26) 中崎「写真裁判」 p. 502.
- (27) R. B. Brettle ed., *Paper and Light* (以下に「紙と光」と略す) D. R. Godin, Boston, 1984, 図版 p. 97.
- (28) M. Haworth-Booth ed., *The Golden Age of British Photography, 1839-1900*, Aperture, New York, 1984, p. 33; Gernsheim「History」 図版 77.
- (29) *Compt. rend.*, **24**, 117 (1847)
- (30) 中崎「カロタイプ」 p. 619.
- (31) Beaumont Newhall, *The History of Photography, from 1839 to the Present* (以下に Newhall「History」と略す) The Museum of Modern Art, New York, 1982, 図版 p. 51; J. E. Burger, *The Era of the French Calotype* (以下に「フランスーカロタイプ」と略す) International Museum of Photography at George Eastman House, 1982, 図版 pp. 48-49.
- (32) *Compt. rend.*, **30**, 663 (1850)
- (33) *Brit. J. Phot.*, 308 (1872)
- (34) 中崎昌雄「重クロム酸ゼラチン法による写真印画と写真印刷」中京大学「教養論叢」第37巻, 第2号(通巻111号) 329 (1995)
- (35) 「フランスーカロタイプ」 図版 p. 51.
- (36) *Dictionary of Scientific Biography*, **11**, 352; Van D. Coke ed., *One Hundred Years of Photographic History*, New Mexico Press, Albuquerque, 1975, p. 77.
- (37) 中崎昌雄「F. S. Archer『コロジオン法』発表(1851年)をめぐって—新しいガラス写真時代の始まり」中京大学「教養論叢」第30巻, 第1号(通巻86号)(以下に中崎「コロジオン法」と略す) 25 (1989)
- (38) *Compt. rend.*, **25**, 579 (1847)
- (39) *Compt. rend.*, **26**, 637 (1848)
- (40) *Compt. rend.*, **29**, 215 (1849)
- (41) 中崎「コロジオン法」 p. 37.
- (42) *Compt. rend.*, **33**, 643 (1851). ここでは名前が「Legray」となっている。
- (43) 名前は「Le Gray」「le Gray」「Legray」といろいろに書かれている。中崎「コロジオン法」 p. 53.
- (44) Helmut & Alison Gernsheim, *L. J. M. Daguerre*, Dover Pub. Inc., New York, 1968, p. 95.
- (45) Newhall「History」 p. 82.
- (46) 中崎昌雄「『直接陽画』ガラス, 紙写真発達史」中京大学「教養論叢」第29巻,

第4号（通巻85号）996（1989）

- (47) Helmut Gernsheim, *The Origins of Photography*（以下に Gernsheim 「Origins」と略す）Thames & Hudson Ltd., London, 1982, 図版 185.
- (48) Gernsheim 「Origins」 図版 187.
- (49) これを銀板写真とする誤りが多い。「ユゴーの生涯」 p. 132; アンドレ・モロア 著（辻，横山訳）「ヴィクトル・ユゴー—詩と愛と革命」新潮社，昭和36年7月， p. 119.
- (50) Beaumont Newhall, *Image*, 4 (7) 1 (1952)
- (51) 「フランス—カロタイプ」 図版 p. 38.
- (52) 「紙と光」 p. 188; Gernsheim 「Origins」 p. 262.
- (53) 「ナダール」 p. 30.
- (54) 「ナダール」 図版 p. 38.
- (55) Beaumont Newhall, *Photography: Essayes & Images*, The Museum of Modern Art, New York, 1982, p. 112.
- (56) 「ナダール」 図版 p. 18.
- (57) Robert Taft, *Photography and the American Scene, A Social Histroy 1839-1889*, Dover Pub. Inc., 1964, p. 188.
- (58) Gernsheim 「History」 p. 429.
- (59) 「ナダール—写真家のころ」 p. 211.
- (60) 「ナダール」 p. 37.
- (61) 「ベルエポック—ナダール写真集」立風書房，1985年10月.
- (62) 「ナダール」 図版 p. 194.
- (63) 「ナダール」 図版 p. 178.
- (64) 「ナダール」 図版 p.68.
- (65) 尾佐竹猛「幕末遣外使節物語」（講談社学術文庫）講談社，1989年12月.
- (66) 芳賀徹「大君の使節」（中公新書）中央公論社，昭和43年5月， p. 96; 中崎昌雄「咸臨丸の福沢諭吉と『写真屋の娘』—『ダゲレオタイプ』と『アンブロタイプ』」福沢諭吉年鑑，第13巻，182（1986）
- (67) 「福沢諭吉全集」第19巻，岩波書店，昭和37年11月， p. 6.
- (68) 「写真の幕あけ」（「日本写真全集」第1巻）小学館，昭和60年12月， 図版 p. 17.
- (69) 「鷗外全集」第36巻，岩波書店，昭和50年3月， p.305.
- (70) 「ナダール」 図版 p. 16.
- (71) 「ナダール」 p. 15.
- (72) 「ナダール」 p. 66.
- (73) 伝書鳩による写真通信については次を見よ。Gernsheim 「History」 p. 319; G. Tissandiers (J. Thomson ed., trans.) *A History and Handbook of Photography*, 2nd ed. London, 1878 (Arno Press Repr., 1973) p. 252.

- (74) Gernsheim 「History」 図版 213.
- (75) 古賀, 川口訳 「ゾラ」 (「新潮世界文学」第21巻) 新潮社, 1970年2月.
- (76) 「Manet」 (日本語版) 美術出版社, 1968年7月, 図版 p.1.
- (77) 「マネ」 (「現代世界美術全集—25人の画家」第6巻) 講談社, 1981年4月, 図版 27.
- (78) 中崎昌雄 「油脂化学者 M. E. シュヴルール—その新印象派画家たちとカラー写真発想におよぼした影響」 (以下に中崎「シュヴルール」と略す) 日本写真学会誌, 58, 138 (1995)
- (79) 「ナダール」 p. 21.
- (80) 「ルノワール」 (「現代世界美術全集—25人の画家」第8巻) 講談社, 1979年11月, 図版 30.
- (81) 日本語訳; 文献 75, p. 789.
- (82) 「ナダール」 p. 208; Gernsheim 「History」 図版 199.
- (83) 伊藤整 「日本文壇史」 (講談社文芸文庫) 第1巻, 講談社, 1994年12月, p. 201.
- (84) 中崎 「シュヴルール」 p. 147.
- (85) Gernsheim 「History」 図版 269.
- (86) 中崎昌雄 「コロジオン湿板からゼラチン乾板へ—写真感光材の進化」 中京大学「教養論叢」第33巻, 第1号 (通巻98号) 66 (1992)
- (87) 中崎昌雄 「George Eastman とロールフィルム写真術—イーストマン・コダック社創設」 中京大学「教養論叢」第34巻, 第1号 (通巻第102号) 145 (1993)
- (88) 「写真家ゾラ」 p. 18.
- (89) 「ゴッホ」 (「現代世界美術全集—25人の画家」第11巻) 講談社, 1980年1月.
- (90) 「ナダール」 図版 p. 2.
- (91) 「後期印象派」 (「世界美術大全集」第23巻) 小学館, 1993年3月, 図版 156.
- (92) 「ゴーガン」 (「現代世界美術全集—25人の画家」第12巻) 講談社, 1980年7月.
- (93) 「鷗外全集」第23巻, 岩波書店, 昭和48年9月, p. 85.
- (94) 「鷗外全集」第22巻, 岩波書店, 昭和48年8月, p. 1.
- (95) 日本語訳, 文献 75, p. 825.
- (96) 渡辺淳 「パリの世紀末」 (中公新書) 中央公論社, 昭和59年2月, p. 23.
- (97) 「写真家ゾラ」 図版 177, 182.
- (98) 「ナダール—写真家のころ」 p. VI.
- (99) 「ナダール」 p. 26.
- (100) 「ナダール」 p. 11.